

深江の心象風景

くふるさと神戸の回想録く

岡田 茂義



深江の心象風景

くふるさと神戸の回想録

岡田 茂義





写真1 岡田茂義氏



写真2 岡田茂義氏の書斎机
(東京・目黒区 駒場、福田誠子氏蔵)



写真3 岡田茂義氏が製作し愛用した茶器 (同)



写真4 岡田茂義邸の南面（東灘区深江南町1丁目）



写真5 同・玄関アプローチ



写真6 同・スタンドグラスのある玄関ホール



写真7 同・暖炉のある書斎の書棚 (いずれも辻照男氏提供)



写真8 慶長10年(1605)摂津国絵図
 深江は川西にあるが地名はない(にしのみやアーカイブ)



写真9 正保元年(1644)摂津国絵図(国立公文書館蔵)

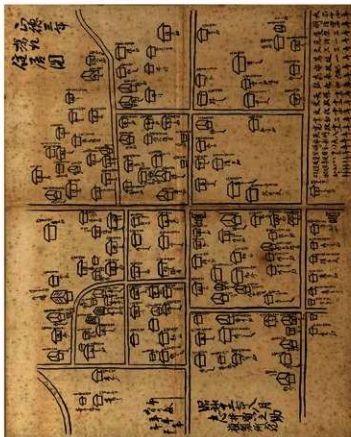


写真10 正徳3年(1713)深江住居図(当館蔵)

昭和12年に志井寅之助氏が写した。署名の上(図下)に大日靈社(大日靈女神社)が見える。村の中央を通るのは、南北の札場通、東西の浜街道で、その交差点に高札場があった。

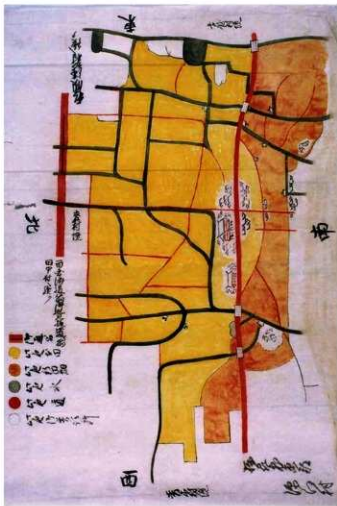


写真11 天明8年(1788)ごろの深江村絵図
 浜街道の北に田畑と用水網があり浜側に新田が広がる
 (神戸大学文学部蔵御影村文書)



写真12 元禄9年(1696)元禄国絵図
(国立公文書館)

写真13 明治12年の本庄九ヶ村本山
三ヶ村全図(当館蔵)
里道が赤で詳細に描かれている



はじめに―深江の歴史と本書のなりたち

神戸市東灘区の東南端に位置する深江は、戦国時代には本庄と呼ばれた惣村のうちの「灘の深井（江）」と史料に現れる。江戸時代には深江村となり、明治二十二年（一八八九）に本庄村、昭和二十五年（一九五〇）には神戸市東灘区となって現在に至っている。

弥生時代の一一基もの方形周溝墓が見つかった深江北町遺跡は、奈良時代には芦屋駅家の一角になったと推定され、街道と港の両方を備えた村だった。明治になって阪神電車の開通により、空気と水がきれいで海に親しめる別荘地として、大阪市内から富裕層が移住。さらにロシア革命、関東大震災の後、難を逃れた白系ロシア人の音楽家たちがこの地で避暑を楽しんだ。また大正期に洋館一三棟の深江文化村が設けられ、ウクライナ人やロシア人音楽家が居住。若き天才音楽家貴志康一や大澤寿人が通い、朝比奈隆や服部良一なども薫陶を受け、著名な音楽家を育んだ関西洋楽の故郷と称された。

こんな歴史と文化のある深江で、岡田家は江戸時代半ばから、網元として有力な家

となり土地を集積、明治になると歴代村長を輩出した。岡田茂義氏は岡田家九代目茂左衛門の長男として生まれ、神戸大学を卒業、三和銀行に勤め本拠を東京に移した。仕事で忙しい茂義氏に代わって深江とのパイプ役は妻のよし子さんが務めた。戦後の農地解放など地主にとって不利な改革が押し寄せる中で、よし子さんは深江と東京を往復し混乱を乗り切った。

茂義・よし子夫妻が深江をどれほど愛したかは、阪神・淡路大震災後の対応に表れる。昭和十三年竣工の洋館、旧茂義邸を修復して保存し、祖父岡田正蔵が大日靈女神社に寄進した狛犬の台座を生かして再建。震災被災者の三回忌には、親鸞聖人像を深江の菩提寺・正寿寺に寄進した。茂義氏の死後によし子さんが、茂義氏の名前を大日靈女神社の玉垣に彫り込んだ。私は深江の歴史編纂の過程で、よし子さんと出会い、岡田茂左衛門の弔辞もいただいた。

よし子さんが平成二十五年（二〇一三）に亡くなり、深江と岡田家の関係はいったん切れたと思っていた。しかし合縁奇縁、えにしは本当に不思議なものだ。切れかけた糸を結び直してくれたのは、私の大学時代の弓道部の後輩、鳥山半六弁護士だった。鳥山弁護士は、よし子さんとともに、戦後の混乱の中で、岡

田家の先祖伝来の財産を守った。同窓会で鳥山弁護士からこの話を聞いたことがきっかけで、三女福田誠子さんとの交流が始まった。福田さんはよし子さんとともに震災で危機に瀕した深江の岡田家の財産を守り、大日靈女神社によし子さん名義の玉垣を寄進している。福田家には岡田家伝来の調度品や茂義氏の遺品もあり、上京して調査させていたのだ。

深江に熱い思いを持っていた茂義氏は、父茂左衛門の五十回忌に「深江の心象風景」と題する小冊子を作成した。九〇歳の高齢ながら正確な見事な回顧録である。法事に参列したわずかな人に配られただけで、神戸深江生活文化史料館の機関誌「生活文化史」で復刻連載した。このたびより多くの人に読んでもらえたらと、福田誠子さんの支援で、単行本として出版することにした。

茂義氏の「深江の心象風景」だけでは分量が不足するので、茂義氏と親しく深江の旧宅保存に尽力した元日建設設計の辻照男氏に旧宅の解説をお願いした。また福田誠子さんと、その長男でこの旧宅に愛着を持っている福田卓矢氏、鳥山半六弁護士、茂義氏と陶芸を通じて親しかった竹田精一郎氏にも寄稿をお願いした。また日本陶芸倶楽部の栗原直子理事長には、茂義氏の陶芸優品を厳選してもらい寸評を寄せていただい

た。併せて私が解説を付け、資料編として「深江村由緒書」や深江の変貌を読み取れる近代地図も掲載した。茂義氏は「深江の心象風景」の結びに、震災の後「急激に伸展の状況が現れてきた」と書いた。地図から茂義氏の深江発展の願いを読み取ってもらえたらと思う。

元の冊子は項目が羅列されただけだったので、単行本にするのに当たって副題を付け、項目の順番は入れ替えず四章立てとし、明らかな誤字は修正した。本の体裁は、よし子さんが執筆した父井上忠也陸軍中將の伝記、また福田誠子さんの長女暁子さんが編纂したよし子さんの追悼集「偲び草」に倣い、茂義氏の祥月命日の四月四日に発行することにした。深江を愛し続けた岡田茂義氏・よし子さんに本書を捧げ、末尾ながら支援いただいた福田誠子さん、縁を結んでもらった鳥山半六弁護士に厚くお礼申し上げたい。

二〇二四年一月

大国 正美

(神戸深江生活文化史料館館長)

目次

はじめに―深江の歴史と本書のなりたち	大国 正美	1
岡田氏邸宅平面図			10
第一部 深江の心象風景	岡田 茂義	11
序 辞				
第一章 氏神と踊り松			14
一、正月元旦、最初の行事／二、深江の氏神さま／三、明治天皇の御霊への深夜の遙拝／四、高橋川の踊り松と淳茅の海				
第二章 深江の街並みと岡田家			29
一、旧道の商店街（深江の商店街）／二、深江の管領地／三、岡田家の家業／四、深江駅前の思い出／五、高橋川の堤を歩いて野辺の送り／六、当時の帰依の拠点、正寿寺				

第三章 六甲山をめぐる人々 49

一、六甲の山並と「青い山脈」／二、二楽荘／三、武庫山―通称甲山／四、三田への六甲越え／五、紺屋の前栽―庭のこと／六、母「ゑい」を昔はどう発音していたか

第四章 深江周辺の風景 64

一、新道を走る馬車型自動車／二、横屋のゴルフ場／三、六甲ゴルフ場／四、大阪湾を往復していた貨物運搬船／五、自作農の経験 並びにその時の台風に関連しての鶴塚／六、当時の神楽町／七、深江の水

後書

解題 「深江の心象風景」と岡田家の歴史 87

はじめに

1 岡田茂義氏と「深江の心象風景」 88

一、茂義氏の略歴／二、小磯良平との交流、絵画・音楽に親しむ／三、戦災

と進駐軍将校の居住／四、阪神・淡路大震災への対応／五、阪神・淡路大震災の被災を免れた旧宅

2 近世～明治前期の岡田茂左衛門家 …………… 101

一、初代～七代の系譜

3 本庄村長を輩出した岡田家 …………… 107

一、本庄村の誕生と三代目村長岡田正蔵／二、分家・南岡田の創設と岡田善蔵の活躍／三、戦時下の村長、岡田茂左衛門の足跡と反骨精神／四、岡田茂左衛門元村長の弔辞の発見

【資料編】

一 古文書編

1 深江由緒書／2 寺社吟味帳

二 近現代地図編

【小字図】 明治～大正期の深江小字図

【地形図】 明治十八年測量～昭和五十三年測量の地形図

【都市計画図・職業図・町並図】 昭和二年神戸市都市計画街路図／昭和五年神戸市都市計画地図／昭和九年ころ灘深江土地区画整理組合道路計画図・確定図／昭和十四年～十五年ころの本庄村全区／昭和十年職業図／昭和十年代前半の回想図／昭和十二年大日本職業別明細図

【災害・戦災図】 昭和十三年・昭和四十二年水害図／昭和二十年御影・住吉・魚崎・本庄・本山罹災状況図／平成七年阪神・淡路大震災被害図

【人工島図】 人工島造成の変遷 昭和四十二年～平成八年

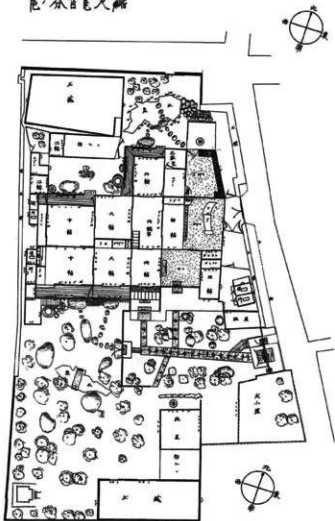
132

123

第二部 岡田茂義氏を偲ぶ	159
岡田茂義様・よし子様が遺されたもの	160
岡田茂義邸について	165
父の思い出	168
深江旧宅の思い出	176
美酒と螺鈿	179
あとがき	181

岡田氏邸宅平面圖

繪尺百餘尺





第一部

深江の心象風景

序辞

この度、父茂左衛門五十回忌の法要を営むにつき、その際参列していただく皆様に深江の昔噺を書いた小冊子を作り差し上げたいと思い、その原稿を平成九年八月九日に書き始めました。

九十才の老軀に鞭を打って、朦朧とした記憶を辿りながらの作業でありましたので、到底ご期待に添うようなものは出来てはおりませんが、何卒ご一覧下さるようお願いいたします。



写真1 昭和31年ごろの岡田茂左衛門旧宅
分家の岡田善蔵に譲られ、北側に曳家工法で移築された。阪神・淡路大震災で増築部分を除き倒壊した。

第一章 氏神と踊り松

一、正月元旦、最初の行事

正月元旦の事始め、最初の行事は森の稲荷神社詣であった。五、六才の幼い頃から始まつた事であるが、未明の暗い道を父に手を引かれて神社に辿り着く。最後の石段を上れば焚き火が赤々と燃えているのを見て元気付き、拝殿で礼拝を終えてこの焚き火にあたり快い暖を取った。その内に空が次第に明るくなり、昇る初日を拝んだ。帰り道は明るい道だが、往き道は厳しい寒さの中の真っ暗な道なので随分長距離と感じた。

岡田家は稲荷神社の氏子であったので、庭



写真2 昔の森の稲荷神社（ガラス乾板写真）

に祠、石灯籠、石の鳥居を構えてその分神をお祀りして、毎月、神田宮司に祝詞を上げてもらった。

二、深江の氏神さま

氏神様である稲荷神社の起源を宮司神田衛治氏にお尋ねした処、次の通りの回答をいただいた。

由緒。社伝によると元正天皇の霊龜元年（七一五年）卯月卯日の夜、深江沖に闇夜を照らす妙な光が現れた。人々が不思議に思つて、海岸に集まっていると、波のまにまに一基の神輿が近づき、そして「われは稲荷の神霊、この山手の森かげに鎮座したい」と告げら



写真3 戦前の祭礼の神輿渡御



写真5 明治末期の大日靈女神社



写真4 狛犬
(大正13年建立)

れた。神託通りにお祀りすると五穀豊穣になり平安な日が続いた。人々は神様の漂着を祝って毎年卯月卯日の日に祭りをを行い「卯の葉祭り」と称して来た、と記載されている。これを以てすれば稲荷神社は文字通り且つ鎮座あとのご利益を見ても正に農業の神、深江の農家の守護神である。また、神輿の船が岸に上陸すべく静かな大阪湾に入り、更に波すら無い淳茅の深江海岸に近寄って来たことも想像出来る。

又、氏子地域としての回答によると江戸時代までは保久良神社と共に近郊の本庄九ヶ村（森、深江、青木、北畑、中野、田辺、三条、小路、津知）の総氏神としてあつく信仰されたが、明治五年に氏子は県の命令で分裂し、



写真6 明治41年の大日靈女神社

明治十二年に村境界が他の莊村の仲介により以後、森・深江・青木の三地区が氏子地として残り、他は保久良神社の氏子地となった。

この稻荷神社には大正十三年二月氏子として岡田正藏、いく、が狛犬を献納している。この狛犬は先年の震災でも健在であった。

尚、深江本来の中心地に大日神社（正式名称は大日靈女神社―編者注）がある。その奉賛会の会長志



図1 本庄九ヶ村

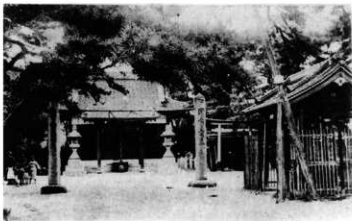


写真7 大正時代の大日靈女神社



写真8 大日靈女神社の茅の輪

井保治氏に神社の事を色々問い合わせる祭神
おおひるめのみこと
 は大日靈女尊、天照大神、仏号では大日如来
 であることを知り得た。一月には一年のお願
 い事をする火祭り、七月には茅かやの輪をくぐつ
 てお詣りする輪くぐり祭があった。唯、大日

神社が現在の場所に祀られた起源については今の処知り得ていない。

当時、講というものを中心として交友の輪を作ったものだ。伊勢講、大峰講、摩耶講などがあつた。大峰講は大峰山の山上さんざんヶ嶽にお参りする

行事で一度は必ず行かねばならない事になつていた。小学校一、二年の頃であつた。お参りする一行と共にその前日一同海に浸つて身を清めて大和の洞川どうがわに向かう。

その宿に一泊して、当日は朝早く暗い内に登山を始め険しい坂道を踏破して宮祠に参拝した。帰り道の途中に四方を見晴らす岩壁があり、いよいよ此処こゝで行が始まる。身を岩壁に伏せて岩に乗り出すと、足を押さえてもらつて前へ摺り落すように突き出される。下は千仞せんげんの谷である。そこで、親に孝行するか、ハイ。勉強するか、ハイ等



写真9 大峰山へ参る深栄講の子供装束 (大正8年)



写真10 森の稲荷神社の伊勢講史料（森・神田正治家文書）

の間答の末、漸く引き上げられて生き返った
 思いで起き上がった。帰りは吉野へ出る道だっ
 た。これが登山の本道であるが非常に距離が
 ある。従って、下り坂ではあるが長い道程の
 ため、而も前日の疲れもあつて歩けなくなり、
 手を貸してもらいながら泣きそうになつて辿
 り着いた。

摩耶講は神戸の裏山である摩耶山の山寺の
 講で寺には釈迦の母、摩耶夫人が祀られてい
 る。寺の講で毎年一月には自家製の味噌、見
 た所金山寺味噌と全く同じであり、小麦の粒
 がそのまま残されているが味は金山寺の様に
 甘くはなく普通の味噌の味である。寺僧がわ
 ざわざ届けてくれるのでお布施料を差し上げ
 ていた。

伊勢講については最後になったが何れの講よりもその組織が大きかった様に思う。お伊勢参りと云えば国民としては欠かせない行事であり、折あれば必ず伊勢神宮参拝をしたものだ。而も職業の各業種に於て各々伊勢講を持っており、その業種の発展のためにその交流を深めて相互扶助を行った。中でも一月の初詣では賑わったもので五十鈴川を渡り、大きな鳥居をくぐって長い砂利道を踏んで宮祠に参拝した。

この伊勢講の力で仮令、氏神様が森にあつても、地元にも神社を設けて加護を願う

べく、伊勢神宮の分神天照大神を

祀る大日神社と定めたのではない

かと推量する。もちろん農業も漁

業もこの庇護の下にはいる。

大正十三年岡田正蔵は大日神社

にも狛犬を奉献していたのである

が、その狛犬が今般の阪神大震災

によって倒壊した社殿の下敷とな

り大破し修理不能となったので私



写真 11 再建された狛犬に付けられたプレート

がこの際、再建を決意して平成八年十二月十一日その完成の除幕式と狛犬再建報告祭を催し、森の稲荷神社の神田宮司による齋式を行った。

三、明治天皇の御靈への深夜の遙拝

幼い頃の記憶として残っているのは、明治天皇が崩御されてその御靈を遙拝するために深夜小学校に集ったことである。明治四十五年のことである。私は明治四十年生まれ、満九十才であるので八十五年前のこととなる。

家から父と共に暗い道を歩き出したが、その時国道四三号線が出来たばかりの時で新道と呼んだ。道路幅は今の半分位のものであったが大きな砂利が敷きつめであって歩くのに苦勞しつつ、小学校に辿り着いた。途中で、矢張り遙拝に集まる人たちと合流した。



写真 12 明治 32 年完成の本庄小学校校舎

暗闇の校庭の中央に薪を燃やして篝火かがりびを焚たきいていた。電灯などの設備は有る筈がない。この篝火をたよりに集合し東に向かって遙拝した。帰り道はさらに一層遠さと暗さを感じた。

四、高橋川の踊り松と淳茅ちみの海

新道しんみちのことを書いたが、従来の道は高橋川に架かっている深江橋の道であり、旧道きゅうみちと云った。北の方には西国街道があり、西国諸大名の参勤交代の道で、岡本、野寄、森、等に沿って京都に通じていた。この高橋川の堤には「踊り松」があり西国街道と共に有名であった。太い大きな幹みきの黒松が二、三本聳たかえ立たっており、淳茅ちみの海の潮風を受けてまことに見事な枝振りを見せていた。その下を流れる高橋川には、ふな、もろこ、川蝦あひなどが清流を泳いでお



写真 13 大正9年完成の校舎



図2 「摂津名所図会」に描かれた踊り松



写真14 大正末期の絵はがきになった踊り松

り、網を以てこれを捕えることが楽しみだった。その辺りの地名を踊松といったが今は本町四丁目となり味気ない。

この川が流れ込む海岸が淳茅の海である。茅とは「かや」であり、淳とは水の淀みである。人偏の停は人の止るところ、更に淳と淳の区別も弁まえねばならない。この浪打ち際は全く白砂の海岸であり、毎年京都

大学の水泳部の天幕を張つての合宿地となつており、我々はそこで泳ぐことを覚えた。元々深江の浜は網引きの所であつた。私の祖先も網引きの元締めをやつており、網屋茂左衛門と云つた。網を束ねて船に積み、沖まで漕ぎ出して網を広げ延ばして左右の網を船と共に岸に漕ぎ付ける。この太い網を、各々十人位の日に焼けて真っ黒な男達が左右に分かれ、「えいやえいや」と網を引く。所謂網引きだ。網を船に引き揚げる



写真15 戦前の踊り松と金毘羅宮



写真16 昭和14年ごろの地引網漁（福田賢二氏撮影）



写真17 網屋茂左衛門の経営史料
（岡田堯至氏所蔵、史料館寄託）

までに、一時間近くかかった様に覚えている。漁獲は片口鰯だ。そこへ子供達が集まって来て各自、船の中の獲物を掻っ攫って、晩茶に持ち帰る。この事

情をよく知っている網引達は大目に見てくれる。この漁獲には色々な魚類が捕獲される。鯛や平目が躍っている。時には「おこぜ」が混じっており、あの逞しい真



写真18 ハンター邸宅（昭和9年）

黒な網引きがこれに刺されて声を揚げて泣いているのを見た。

我々小学生の子供達が、この網引きを真似て小型ながら網の用具を揃えてもらって、お盆祭りの灯籠流しで短冊やお供物を積んで海に流された小さな船を沖で拾い上げ岸に持って帰り、その小舟に用意してあった網の用具を積み込み、皆で泳いで小舟を沖まで運び網を広げて沈め、網を持って小舟と共に岸に泳ぎ帰る。本式に左右に分かれて網を引く。矢張り鰯を主とするが、色々の獲物があった。小さい獲物であるが「竜の落し子」が獲れたことを覚えている。大阪湾にもこの様な生物が当時生息していたのだ。この網引きの遊びにも、前記の京都大学水泳部の水練教育が非常に役に立った。

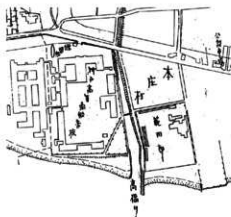


図3 ハンター邸
(灘深江土地区画整理組合道路計画図)

踊り松から海岸に向って広い敷地があり、それより白砂の海辺が広がる。ここが京大水泳部の合宿地である。この大きな広場は英国人、ハンターの住居地であった。日本文字で「範多」を使った。貿易商であり今も尚、範多商会として存在していると思うが判然とせず。背の高い息子があり神戸一中のサッカーのゴールキーパーをやっていた。母親は日本人で混血児かもしれない。

第二章 深江の街並みと岡田家

一、旧道の商店街（深江の商店街）

新道しんみちに対する旧道は深江の本通りであった。駅からこの本通りに入り東に向かつて進むと、深山医院、阪口医院、豆腐屋があり、道の対面に八百屋の岡富さんがあった。更に進むと荒物屋があり、少し奥まった所に質屋があった。道の北側には大きな店舗、上増呉服店かみぞうがあり、更に東に油屋、散髪屋と続く。それ等の店舗と交り合まじって住居が並んでいた。岡田の家もこの道に沿ってあったが南北の通りの道角にあり、この通りにあった門から出入した。

ここに記した上増呉服店は大きな店であった。



図1 深山医院のスケッチ



写真1 上増呉服店の外観



写真2 上増呉服店の店内

深江第一の商店であり繁盛していた。通りに暖簾のれんが下っており、これをくぐり、入ると広い畳敷きの大広間が開ける。色々の呉服物が種類を分けて各所に積み重ねてある。

思う品物の所
 に行つて、丹
 物を広げても
 らつてそれを見
 見る。時々、
 この店から男
 女の東西屋
 (宣伝屋) が
 出て来る。男
 は皿鐘の付い
 た大きな太鼓
 を胸に当て、
 両手で撥ぼを打

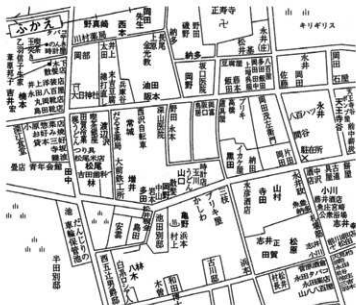


図2 昭和10年代前半の深江中心部の回想図
(昭和13年の本庄小学校卒業生による)

ち、太鼓と鐘を鳴らしながら最初に「東西、東西」から始めて大きな声で上増屋の宣伝広告をしながらい進する。女は美濃笠をかぶり、手甲、脚絆の姿で三味線を太鼓に合わせながら後に従う。チン、ドン、シャンと鳴らすので、ちんどん屋。とも云った。

前記の南北の通りを辿れば旧道より南へ進むと、先づ八百屋が出て来る。今では珍しい。棒だらが藁縄で吊してある。鯛の干物であるが偶々食卓に出ると不味いなと思った。

次に新道を越すと岩田屋の酒屋があった。立派な建物の酒屋で裕福な家であるので悠々と商売をしていた。店にはいると大きな酒樽が目につく。客があれば栓をゆるめて直接枡に入れ客に出す。客は枡の隅から飲む。枡の枠に塩が載せてあるので塩を肴にこれを舐めながら飲んだ。

その頃、芦屋はまだ開けていなかった。殊に西打出などは、毎日岩田屋へ酒を買いにきた。子供たちをそのお使い役として集団で遣わした。五、六人の子供たちが毎日やって来る。我々子供達はそれを待ちかまえた様に見守っている。時にはお互いに集団闘争ともなった。そんな事があるので相手は一人だけ年上の頑丈な子供が付いていた。

その南隣りに料理屋があった。石松と云ったと思うが判然としない。なかなか上手に料理をしてくれて、時々のご馳走にお造りを頼んだり鮎を頼んだりした。これより更に浜の方に進むと八百屋があった。息子がいて、昭和の初期私と徴兵検査を同じくした彼は甲種合格だったが、私は第二乙種合格と怒鳴られて帰って来た。当時宇垣大將の軍縮の時代であり大部分は丙種であった。とは云うものの開戦となると乙丙の差別もなく、多少の時期の差はあっても甲種同様に殆ど全部徴兵された。

私の場合は戦争の最末期、神戸の空襲により軍の徴兵台本が焼失した。後は市町村に対して何名の壮丁^{せうてい}を出すべしとの令書が役場に來た。当時父は深江の属する本庄村の村長をしていた。役場で壮丁を選出して軍に提出した。私は幸いにしてその選を免れた。

尤も、私は当時銀行の特別防護団の第二部長（第一部長は退役陸軍中尉）となり大阪空襲の時は地下に部員と共に（夜のことなれば）全員逃げ込んだ経験がある。

南北のこの道を交叉する新道にはブリキ屋、菜屋、餅屋、下駄屋などがあった。その中心部に警官の駐在所があった。家族で定住していた。

註　ブリキは鍼力と書いた様に記憶する。今住んでいる東京には広しと雖もこのブリキ屋の表示を見ることはなかったが、最近漸く「ブリキ店」の看板を見付けたが、横にステンレス加工と添示してあった。ステンレス加工の表示があつて初めてこの店舗の仕事が分る。場所は目黒区東山蛇崩^{へびやぶ}の三方交差点の所にある。蛇崩とは、目黒川が氾濫して堤に敷設してある蛇籠が度々崩れることからの由来だろう。ブリキは今では生産されてはいないだろう。薄いメッキが直ぐ剥^はけて下地の薄鉄板が赤く錆^{さび}びる。昔はよくこの錆び付いた屋根

を見かけたものだ。また、ブリキは厳格に云えば錫すずメッキの鉄板である。ブリキ屋は初めは、このブリキを使っていてブリキ屋と云ったが、次第に亜鉛メッキに変わって行った。その方が安くて永持ちするからである。この亜鉛メッキのものをトタンと云う。ブリキ屋がこのトタン鉄板を使ってトタン葺きの屋根を作った。然し、この作業の者をトタン屋と云わず、相変わらずブリキ屋と呼んだ。ブリキの語源はオランダ語の *blauw* によるものである。

二、深江の管領地

元来深江の土地は管領地であった。普通は城主があつて土地はそれに所属するものであるが、ここは徳川幕府直轄の地で所謂「天領」であり、幕府無き後、政府の管領地となった。従つて、住居の集合地を境として、その東側より芦屋川までの広域地帯は個人所有が無く、地租（固定資産税）が全く上らず政府として已むを得ずこれを個人割当てにした。当時我が家は代々村長をしておつたので割当も厳しく、新規割当の土地からは収入皆無の事として、従来の所から上る収入では到底賄えず、遂に居を神戸の加納町に移した事がある。どの様な経過があつたか知らないが、また元の深江に戻

り割当地に綿の木などを植えた。割当地は
何れも水利もきかず荒涼たる荒地ばかり
だった。

時代が少し移り、正蔵の時にこの割当地
の芦屋川寄りの砂地に黒松の苗木を植えた。
この所は元々水田であったのだが、年々の
芦屋川の氾濫によって砂で埋められ、全く
利用出来ない状態であった。そこで黒松は
早く成長するとしてこの苗木を植えたが全
くその通り。戦争当時、神楽町と呼んだが
ここに住居を建てた時（昭和十三年）、既に
太い幹になっていた黒松が敷地の中に五十三
本もあり毎年冬に藁で松の幹を巻いてその
中に害虫が冬眠するため籠るのを春に焼き
捨てる。そのために五十三枚の藁巻を作っ



写真3 岡田茂義氏邸の南側の庭

た。住居の敷地の外に、その一区画三千坪の所にはこの黒松が生い茂り、戦時中、川西航空機の未完成戦闘機の隠し場所として利用された。穴を大きく掘り機体を埋めようとするが思うに任せず、一部、外部に現われていて機体のジュラルミンが月光を受けてキラキラと反射して、これでは敵機の目を逸らし得ないと思った。

三、岡田家の家業

岡田家の家業は網屋茂左衛門と云う様に網引き（漁夫）の元締めであったが、元来浄土真宗西本願寺の門徒であり、殺生禁断の法則に従い漁業を廃めて酒造りに移った。祖母いくが三田、日西原の出であったので、三田米を運んで醸造し「正蔵」の銘を付けたが、なかなか技術が必要で、殊に麴と精米を大桶に仕込んで寝かすことが、当時は非常に難しい作業だった様に思う。今は簡単に桶の温度を調整出来るが、当時は暖冬ともなると、酒になるべき麴と米が一晩で酔になって終わったそうだ。高価な米を沢山使用しているので、一晩で身上限り（破産）となったと聞かされた。

そこで、こんな危険な仕事より大桶があることなれば、醤油を作ろうと云うことになった。

蔵の内には大きな桶が並べられ、上の天井には長い梁が渡されている。その梁を伝わって鼠が走っている。時には下の大桶に落ち込むことがある。梯子を掛けて上り大桶の中を時々見るが、鼠が死んで浮かんでいることがある。驚いてこの事を伝えると、これで醤油に味が付くのだとの答えが返ってきた。この事を、随分後の事とはなるが既に亡くなられたキッコーマンの社長、茂木左平治さんに聞いたことがある。笑って答えず。銘醸造キッコーマンにもこの様な事が度々あるのだろう。

四、深江駅前の思い出

阪神電鉄、大阪軌道鉄道（大軌、今の近鉄）、南海鉄道は早くから開通していた。何れも明治年間、或いは、大正初期の創業であろう。祖母に伴われて大阪に行くとき、淀川の長い鉄橋を渡る。祖母に抱き上げられて前方を見れば、鉄橋の梁の連続が恰もトンネルの形を見せ、長い長いトンネルを通っている様な感じを味わった。

早くより開通している阪神電車の深江駅の南側に、小さな百二十坪程の土地がある。先祖代々受け継いだ土地であり、売る訳にいかず、唯今、そこに駅前にあふさわしい商店を容れる三階建の貸しビルを建設中であり、本年中（平成十年―編者注）に完成の

予定。

この所を昔、貸家として利用しており岡本瀧三郎さんに貸していた。阪神電車に勤めていた。立派な風格の人で、その母も亦、大柄な風貌豊かな土佐の人であった。それにふさわしい話も聞かされた。自分で子を放る。屁を放ると云う様に産婆の手を借りずに自分一人で子を産む。この男勝りの豪放な性格は土佐人の気迫であろう。

瀧三郎さんは音声がよかった。而もよく響く声だった。当時流行した浪花節が得意でよく家に来て謳ってくれた。浪花節だから語ると云うべきか。その大家の吉田奈良丸が住吉に住んでいた時代の事であり、その指導を受けていたのかもしれない。語り出すと浪花節だ



写真4 昭和5年の深江駅（『神戸高等商船学校』の卒業アルバムから）



図3 昭和10年代前半の深江駅前の
葦原邦子と乙羽信子の生家

から一曲に長時間かかる。幼い私など直ぐ母の膝に眠ってしまった。

この瀧三郎さんの娘が昨年（平成九年―编者注）亡くなった葦原邦子であり、この貸家で生まれ、ここで育ち、宝塚歌劇へもここから通った。暫く経つと、この貸家も古くなったので新しく旧道に面した所に貸家を建てたのでこれに移り住んだが矢張りここから宝塚に通った。葦原邦子は尼崎女学校を卒業したが非常な優等生であった由。

その後、宝塚へ通うのも尼崎からの福知山線を利用したのであろう。まだ阪急神戸線が通じてなかった時代である。

深江駅前には、お餅屋さんの娘、乙羽信子が育っている。

平成九年八月十三日、テレビ放送、「徹子の部屋」で、淡島千景との対談、「葦原邦子さん追悼―平成九年三月十三日亡―」があり、



写真5 皇太子（現在の皇）誕生を祝う深江の人々



乙羽信子

我々が高商時代（昭和の初期）に憧れた葦原邦子の宝塚歌劇も初期の時代の写真が放映されたので懐かしく思った。葦原邦子と黒柳徹子の対談（昭和五十四年六月）も再放送された。

さて、この貸家の裏に大きな池があり、蓮が植わっていた。毎年八月十五日、お盆の頃、大きな華やかな赤い花

が咲く。父がこれを盥船に乗って切り集めて来る。父は豊中の近くの桑津村（現伊丹市）で育った。今でも箕面を経て京都への西国街道（国道一七一号線）沿いに、大きな姿を見ることが出来る「昆陽の池」の近くである。従って、幼児の頃より盥舟に乗って池底の蓮根を掘り採った。盥舟と云えば、洗濯用の普通のたらいより多少大きく深い。然し、これに乗り込んで浮かんで行くことは非常に難しい作業だ。しかも深江の池の場合は普通の盥を使ったので苦勞した事と思う。

こうして切り集めた蓮の花を菰で包んで駅まで運び、電車で三宮、それより花の市場へと運び込む。

池から上る時、瀧三郎さんが漸く起きて来て歯刷牙子で一生懸命歯を磨いている。見られると恥かしいのでその目を避けてこっそりと逃げて行く。

質素な生活をして小銭を儲けると云うのが岡田家の仕来り（家憲）だったのだろう。

尚、父は正市と云い林家の四男として明治五年に生まれた。林家は当時広大な農地を所有していたが後年伊丹空港設置のため買収された。岡田家へ入婿となり、母を娶いと結婚した。昭和九年に正蔵より家督相続し、九代茂左衛門を襲名した。

五、高橋川の堤を歩いて野辺の送り

昔の葬式は、焼き場（火葬場）が今の墓地の一面にあったのでそこまで野辺の送りをするのである。お棺を納めた輿を担いで、淋しい高橋川の堤の道を静かに進むのである。灘の天井川と云って、川はすべて地面より高い所を流れている。六甲山は花崗岩で出来ているので、もろく壊れて砂となり、川はこの砂で埋まり、流れを防ぐ堤防は次第に高くなり、流域の田畑より一段高い所を水が流れるので



写真6 昔の高橋川河口

瀧の天井川と云う。

当時とすれば、極めて長寿であった曾祖母（ひいばあさん）おたきさんが八十二才で亡くなり、小学校一年生の頃と思うが黒い詰め襟、半ズボンの洋服、黒い編み上げ靴を履いて、形見の品である、愛用していた杖を奉持して柩こはこに添って野辺の送りをした。このおたきさんは最後まで割合健康的で、家の中を歩くととき、「ホイ、ホイ、ホイ。」と云いながら座敷を横切って自分の部屋に行った。然し、時には漏らしながらそれと知らずに。

おたきさんは神戸生田の素封家増田甚五郎家の松造を養子として入れて、茂左衛門を襲名させることにした。この増田家はこ



写真7 昭和5年の高橋川（『神戸高等商船学校』の卒業アルバムから）

れも資産家の北風家と親戚関係にあり、更に北風家は生鳥家の分家であり、本家の生鳥五郎左衛門と云えば当時神戸第一位の素封家である。その子孫である生鳥五治君が三和銀行に勤め秘書役などをやった。ある機会に彼に、あなたのお名前五治の五の字の意味を知っている者は、三和では私一人だろうと云った。彼も感激していた。

尚、詳しい家系については過去帳参照のこと。

野辺の送りが済めばいよいよ



図4 深江の火葬場

よ火葬である。火葬場には赤い煉瓦を積み上げた四角い煙突があつた。納棺したら、炉の扉口から糞束を指し込み燃やした。読経が終りこれで野辺の送りが済んだのである。遺骨拾いはその翌日。燃料は薪であり、現在の様に火力は無く、即刻取骨は出来ない。然し、骨は完全に収納することが出来た。喉仏を一番に捜した。最近二、三の火葬に参列したが、何れも肝心の喉仏を拾い出せなかつた。火力が強いので、骨が壊れてしまう。仏壇に持ち帰って供養すべきしるしが、無くなつてしまうのである。

六、当時の帰依の拠点、正寿寺

平成九年三月二十二日、深江正寿寺に寄贈した親鸞聖人鑄造物の除幕式があつた。午後一時、志井さんに講の首脳として指導していただいた。三十名集まる。家内と二人で白い幕を引き落とした。読経焼香の後、次の様に挨拶をした。この献像は震災供養と見るべきだが、更に意義深く、親鸞聖人に帰依して門徒として教えを受け、人生を導いてもらうためだと説いた。丁度今は彼岸（二十日が春分）の頃である。八十数年前の幼い頃、春秋の彼岸には必ず祖母に手を引かれてお寺詣りをした。大きな本堂に座つて上を見ると、幅の広い欄間に大きな瓶びんが割られて噴き出る水の流れに乗つて、

子供が飛び出している。司馬温公の智仁勇の造形である。子供が瓶の中に落ちた。咄とつに瓶を割る考えが頭に浮かぶ（智）。友達が瓶に落ちた。何としても助けたい（仁）。大きな石で、大きな瓶に挑み、これを破る（勇）。この智仁勇を見上げながらお説教を聞いた。

この本堂は戦災で焼け落ちた。茂左衛門が妻をいの供養のため奉納したお堂のふすま絵も、戦災で焼けてしまった。

註 諸橋轍次篇

『中国古典名言事典』。司馬温公、本名司馬光。北宋の名臣。王安石の新法に反対する。大師温公を贈られた。



写真8 岡田茂義氏が寄進した親鸞聖人像 現在場所が移転している



写真9 戦災から復興した正寿寺
阪神・淡路大震災で再び全壊した

幼い子供が院主さんのお説教を聞いても分かる筈はずがない。祖母の膝ひざで眠ってしまふ。大人の人達もこくりこくりと眠っている。そこで院主さんは説教を止めて落語に移る。万才かも知れない。

「お前どこから来たの？ 住所を云いなさい。」

「大阪ド、トンプリ川のコ、ニヤクヤのシャ、クヤ、」

「何、はつきりと言いなさい」
再び、

「大阪ド、トンプリ川のコ、ニヤクヤのシャ、クヤ、」

「分からない事を云うのやなあ。大阪道ちみち、道頓堀川どんごりがわの菟藪屋うさぶしやの借家か。やつと

分かった。」

これで皆の衆、どっと笑って目が覚めた。

再び説教が始まる。説教が終つて一人の老人が質問した。

「院主さん、ほんまに地獄極楽ありますのか？」

その答えは、

「ほんまにあるのかどうか儂も見たことがない。然し、若しほんまにあつたらどうする。それだから今から説教を聞いて善行を積まねばならぬ。」

第三章 六甲山をめぐる人々

一、六甲の山並と「青い山脈」

北を見れば六甲連山の山並みが展望される。南に
淳茅ちみぶの海。昔の深江の地は風光明媚めいびな所であった。
この曲の作者、服部良一もこの六甲連峰に魅せられ
た。青い山脈の曲は服部良一が阪神電車の車窓から
見た六甲山の山並みを楽譜にした。

「戦後間も無い車内は間屋や買出しで混雑してい
た。」と彼が云ったのを憶えている。

処が、週刊新潮平成七年八月夏季特大号に依ると、
「青い山脈の記念碑が群馬県の吉井町の牛伏山に建っ
ている。青い山脈と云えば、石坂洋次郎の小説を西
条八十作詞、服部良一作曲」の記載がある。牛伏山



写真1 高橋川下流からみた六甲山の山並み

の頂上に立った服部さんは「素晴らしい展望だ。僕が作った青い山脈のイメージにぴったりだ」と云った。吉井町の人々が「山脈の会」を作って碑を建てた、と同町商工観光課の山田稔課長の話。

然し飽くまで、服部良一の見た山並みは六甲山であったことをここに明記する。

註

予てより青い山脈は六甲山であるという事を確信していたが、この度、平成十年六月五日付テレビ朝日（一〇チャンネル）午後九時の「驚きももの木二十世紀・名曲誕生に感動秘話」に服部良一が西條八十作詞の「青い山脈・雪割れ桜」を車中より見た六甲山の深い印象とその感動を以て、昭和二十三年に作曲したものである、との一節を確認した。

服部良一が牛伏山より連山を眺めて「青い山脈そっくりだった。」と云ったとしても作曲とは関係の無い事であり、六甲山を見ての事であるのは変わりはない。「青い山脈」はどこまでも六甲山である。

服部良一は十六才の時より大阪シンフォニー・オーケストラのメンバーとして所属

しており、当時より既に作曲を手懸けていた。而も西條八十のものが多い。蘇州夜曲もそうだ。他の曲と共に一世を風靡する名曲とされて一流の歌手が競って唱い、更に映画にもなり劇にもなった。

二、二楽荘

平成六年六月二十九日、禮子と商用のため六本木のジエトロへ行き、帰りに青山の料亭「穂積」で昼食を摂った。その時、大きな赤い山桃が料理に使われていたのを見て、これを契機として、神戸本山の山桃の樹が群生繁茂していた山とそこにあった二楽荘の話をした。この山桃の樹の群生の山は麓から隣接している位置で、下から見るとこんもりした形の山の色が緑濃く他の山並みと判然と区別される。

この山の中腹に西本願寺の大谷光瑞師の発想による二楽荘があった。印度、或いはアラビアの寺院を模したものである。円形の塔柱があり、タイルを敷き詰めた大広間に矩形の大きな池が水を満ちており、睡蓮が浮かび鯉が泳いでいた。

麓から山道を二楽荘まで登ったら、そこにインクラインが設置されているのを見た。インクラインと云えば、京都に非常に関係のあるもので、明治初年東京に遷都されて



写真2 二楽荘本館
（『二楽荘写真帖』大正元年、和田秀寿氏提供）



写真3 二楽荘本館（同）



写真4 二楽荘第一ケーブルカー（同）

より京都も時代に遅れないようにと特に文化の進歩に力を入れた。その一つとして琵琶湖を利用すべく、その水を京都に引入れる構想であり、その為に東山にトンネルを造る大工事を行い見事完成させ、水運のための船をインクラインという新知識を以て上陸させて運送の便をはかった。

この構想を光瑞師は直ちに二楽荘に応用した。二本の細いレールの上にトロツコが乗っていて、引上げるワイヤーが付いている。今のケーブルカーである。当時はインクライン（傾斜用カー）と云った。光瑞師は印度の虎狩りで有名であるが、第二十二代御門主（鏡如上人）である。

併せて、西本願寺一族の大谷光明師のゴルフの業績の一つを書く。昭和六年、彼が川奈の富士コースを造っていた時に、偶々ゴルフ場設計で有名なアリソンがホテルに泊まっていた。これ幸いとコースの一部を設計してもらった。アリソンはアリソン・バンカーとして、難しいバンカーを造るので知られている。このコースにも二、三カ所この型（グリーンの下にバンカーがあり、上のグリーンが端が顎あごの様にバンカーに張り出している）のバンカーが存在する。

アリソンはこのバンカーを全国で三カ所造った。東京倶楽部（朝霞）と広野と川奈である。東京倶楽部は元々駒沢にあった東京倶楽部で一般の交友倶楽部として存在したので特にゴルフの名称は付けていない。朝霞に移ってから「東京倶楽部」を継承した。処が、戦時中ここが陸軍の飛行場に徴収され、今の東京ゴルフ倶楽部の場所に移り、この時よりゴルフの名称が付け加えられた。

我孫子あひこにも相模にもこの型のバンカーはあるが、何れも上記三カ所のものを真似て作ったものである。

川奈のコースに戻る。平成三年（一九九一年）未年（辛未せいのひつじ）の正月、年男として川奈大島コースを廻る。坂道の連続で難渋してスコアは悪かったが、4番の good bye ホー

ルは右寄りに見事に打って谷を越した。又6番60sホール(147s)は更に深い谷(左寄りには海水が進入している)を越して直接グリーンを狙い、one-onさせた。ブリッジを渡りグリーンに行けば、見事乗っていた。

然し、ブリッジを渡って戻った次のホール7番Ohrai's smileでは前面の谷(6番の谷の延長)に残念乍ら落としてしまった。大谷光明師はこの難しいホールを見事one-onさせて思わず微笑した。これがこのホールの名称となった。更に次のシヨート・ホールTwin(Hits)で前面にアリソン・バンカーがあるので左へ打ち、セカンド・シヨットを右にあるアリソン・バンカーを避けて、左の土手に向けて打ち、クツションを取り、グリーンに乗せたが右傾斜のグリーンの為、遂に右奥のアリソン・バンカーに落ちる結果となり、顎のある深いバンカーで四打を叩いてしまった。つくづくアリソン・バンカーの難しさが身に滲みだ。

三、武庫山―通称甲山

①神功皇后が九州の熊襲を討ち、更に武内宿禰とはかって海を渡って新羅の都城に攻め入り国王を降伏させ、百濟・高句麗をも帰服させて引き上げた。所謂三韓征伐で



写真5 武庫山
 (「寛延3年撰津名所細見大絵図」)

ある。その時の戦利品である武器を武庫山に納めて戦勝を祝福した。

これは記・紀の記事によるものであるが史実性が少なく伝説的であるとの評がある。
 (平凡社「世界大百科事典」)

尚、武庫と呼ぶ由来は奉納した武器の倉庫のことであり、甲(兜)は山容が甲の鍔の形をしている所に語源がある。而も甲山については地殻の底から押し上げてくる火山噴出の力が六甲山の花崗岩層で押さえられ熔岩が甲の鍔の形で固定安定した。この花崗岩層の結晶が脆く次第に白砂となって流れて行き、あとに硬い岩質の甲山の見事な山容が残り、麓から極めて近い目の前にこの山容を見ることが出来る。

② 船弁慶、能の課題である。義経は

頼朝との不和のため都落ちして摂津大物の浦より船で西国に亡命せんとした時に、俄に風が変わって、武庫山、讓葉が嶽よりの強風により難航しだした処に、平知盛を初め平家の一門現れ出でて怨みを晴らさんと襲いかかってきたが、弁慶は東西南北中央の諸仏に祈りをかけて平家の追手を追い払い、漸く船を汀に漕ぎ寄せた。

四、三田への六甲越え

深江から六甲山を越えて行く山道の「魚屋道」(一般には「ととやみち」―編者注)は有名であった。神戸からの有馬道はあったが阪神間ではこの道だけだったのかもしれない。西宮からなれば、寧ろ宝塚に出て有馬を経て三田へ行く道を選んだのだろう。深江は漁場である。大阪湾で獲れた魚類を天秤棒で担ぎながら山を越す。それについて母あいから聞いた話が面白い。

天秤の片方は荷物、反対の片方に畚(広辞苑―竹・藁で編み、物を盛って運搬する具)をぶら下げてその中にまだ小さかった自分が入れられて担がれる。時には担いでいる者が肩を替えるために載っ



図1 畚



写真6 魚屋道（「正保国絵図」国立公文書館蔵）

けて来る。若し、躓いて転べば忽ち襲いかかる。そんな危険が度々起るのだが、その時は、早速帯を解いて片方を確り持ちながら地に落とし、長く延ばして歩いて行く。身に近に付いて来た狼は長い帯の端まで遠ざかる。若し、転んだ場合でも起き上がる間をここに作る。色々危険を冒しながら六甲山を越したと聞かされた。

ている畚が谷の上にかかる。下は千仞の谷だ。恐ろしくて思わず声を出したそうだ。然し、こうしても母は自分の母おいくさん（私の祖母）の郷を訪れたかったのであろう。祖母の郷は日西原の測上の姓であった。

測上家は神戸への往復がよくあった様で有馬道を通った。時には狼が後を付



写真7 魚屋道〔六甲—摩耶—再度山路図〕前田康男氏蔵



図2 深江～日西原の位置関係
 (20万分の1地勢図「京都及大阪」国土地理院)

有馬道の事はさて置き、深江からの六甲越え魚屋道に戻り、そこには紺屋の前栽と云う見所があった。

五、紺屋の前栽―庭のこと

深江の旧道の北側に木下理髪店があり、その奥に磯野萬治郎さんのお宅があった。更にその奥辺りにこの紺屋（紺屋の白袴と云う様に）の藍染め屋があった。名前は思ひ出せない。この人が藍染めの商売で、三田との往復をいつも魚屋道を通っており、今は芦屋ゴルフ場の区域になっているが、岩間を通り抜けると、一面に開け奇岩を置き並べた様な広場が展開される。その岩と岩との合間に松の木が低く平伏した恰好で美観を添えている。峻しい坂を登り、岩間を抜けた途端に開ける美観を彼はつくづくと眺めて、同時にこの景色を自分の住まいの庭に持って行きたいと念願し、又、人にも語ったのであろう。それでこの山の景色を人々が紺屋の前栽と云うようになった。ゴルフ場開発のために、この風景も取壊されただろう。

六、母「糸い」を昔はどう発音していたか

平成六年二月に、サッポロビールがその昔のエビスビール工場の広い跡地に、ガーデンブレイスという総合開発事業を計画し、分譲棟の一号館の販売が開始されてその案内書が届いた。

その物件の表示に Yehizu Garden Terrace の文字が使われている。恵比寿の発音は日本語本来のわ行の発音を基準として、その表示を定めたのであろう。

それについて、祖父、正蔵は娘糸い（私の母）を呼ぶ時は「おいえい」と云った。これが正式の糸の発音だと私達は面白く聞いた。w をきかせて「おうえい」が正当だろう。みは「うい」で、をは「うお」と発音するべき



写真8 岡田正蔵の使用した行楽用の弁当箱
(明治35年購入、福田誠子氏蔵)

だろう。

当時、土佐の地方もこのわ行の発音が守られていた様だ。息子を京都大学に入れて将来の出世を望んでいた父親が、夏休みに帰省した息子のわ行の発音が通俗化し乱れていたので、自分は苦勞して京都大学まで入れたのにこんな事になるとは、と嘆いたそう。

尚、母糸いは明治十二年正藏、いくの長女として生れ昭和六年に亡くなった。

第四章 深江周辺の風景

一、新道を走る馬車型自動車

頃は第一章の三に記載されている明治天皇崩御の前後、即ち明治時代の終末期である。新道（しんみち）をオープン型の馬車にエンジンを付けた様な自動車が走って来る。我々子供達（何れも六〜七才位）は先を競って車と共に一緒に走る。運転手の外国人が鞭（むち）を振って、我々を振り払おうとする。一度その鞭が顔に当たって痛かった。思いが今も記憶に残っている。

当時天皇陛下は行幸の際、数頭立てのオープン馬車をご使用になった。その後



図1 明治43年ごろの深江
浜街道から分岐して南側に新道



写真1 新道 岡田善藏宅の南側附近

自動車に変えられたが、各国大使が新任挨拶のため宮中へ参内する時は宮内庁所属のこの馬車を使用して自動車の流れの中を悠々と走らせているのを見た。

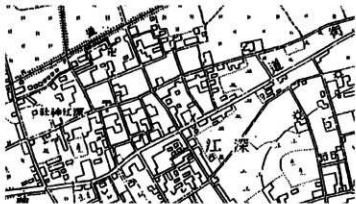


図2 大正12年ごろの深江
新道が「街道」となり浜街道より太く描かれている

二、横屋のゴルフ場

新道の風物につき一件書き添える。青木と魚崎との間に新道に沿って大きな草原があった。地名は横屋と呼んで、そこには一軒の家も無かった。遙か南を眺めると向うの海岸にはスタンダードの煉瓦造りの石油貯蔵倉庫があった。それと新道との間の広漠たる草原がゴルフ場になっていて、スタンダードの人達がプレーした。小学校初年級の我々の友達が、時々このコースのロス・ボールを拾って学校に持って来る。皆、歓声を上げて喜び、ボールを切り開いて中のゴム系を取り出し各人に分け合った。これが皆の竹製模型飛行機のプロペラを廻すゴム系となった。

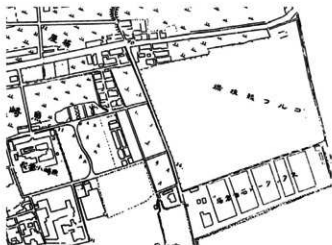


図3 横屋ゴルフ場とスタンダード石油 (『魚崎町誌』)

当時六甲ゴルフ場は既にあつた様だ。後記してある「六甲ゴルフ場」に記載の「短い鉛筆」に依ると、明治三十四年英国人グルームによつて造られている。横屋の方はいつ始められたか知らないが六甲と並行して存在し、而も完備しない。らしき。ゴルフ場であつたので、古くとも日本最初のゴルフ場とは云い難い。又、そのあと横屋に甲南ゴルフ場が出来ている。同じく「短い鉛筆」による。南郷三郎（ゴルフ界の重鎮）等によるものと思う。或期間この名前の下でその草原が利用されていた様だ。

三、六甲ゴルフ場

南郷茂宏（ちかひろ）「短い鉛筆」によると英国人グルームによつて、六甲山上に日本で初めて四ホールのゴルフ場が造られた。彼は明治元年二十二才の時来朝し、ゴルフ場を造る数年前に六甲山最初の別荘を建てた。六甲山の開拓者でもある。その後、社団法人神戸ゴルフ倶楽部として日本人も入会させ、明治四十年には、一八ホールをオープンしたと記載されている。然し、戦後私がプレーした時は二、三ホールの不足があつたことを記憶している。峻（げん）しいホールを使用していなかつたのかも知れない。

外国人により創設されたゴルフ場であるので、クラブ・ハウス内の表示も日本離れ



写真2 神戸ゴルフ倶楽部
 (絵はがき「六甲山上ゴルフ遊戯場」)
 昭和7年改修前の初代倶楽部ハウスが写っている

したものがたくさんあって戸惑った。W・Cの表示の所が、正式にウォーター・クロセット (Water closet) と書いてあるので便所とは思えなかった。今でもそれ等の難しい表示が残っているだろう。持ち運ぶクラブの呼び方も同様でドライバーはW・1、スプーンはW・3、ブラッシーはW・4、マッシーはアイアンの5、マッシー・ニブリックはアイアンの8、それにバターと計六本くらいで廻ったのだろう。我孫子ゴルフ場の会誌によると driver は飛ばす club、spoon はその形、パッフィーは球を打った時の擬音、ブラッシーはプラス (Dress、真鍮) を底に張り付けたからとある。「何かちよつと



写真3 六甲山の籠昇き（絵はがき「有馬六甲山道」）

した思いつきで愛称が始まったように思われる。」と書いてあった。

尚、「マッシー」とは伊達男、「ニブリック」は醜男の意味であることも面白く付記されていた。

六甲ゴルフ場でプレーするメンバーは籠（荷い籠）で山上まで担ぎ上げてもらった。この籠昇きの一人が有名なプロゴルファーになった。宮本留吉である。彼は日本オーブンを六度制覇し、全米チャンピオンのピリー・バークとプレー。オフシ、ポビー・ジョーンズにも勝った記録を持っている。ゴルフ界のリーダー赤星六郎のコーチを受けた。

四、大阪湾を往復していた貨物運搬船

深江の浜から沖を見れば、いつも黒い貨物船（船型の運搬船）が西へ東へと往來していた。神戸港と大阪港を連絡する運搬船でその往來は絶えなかつた。

当時工場のあらゆる機械は総べて蒸気機関で動かした。その燃料は石炭である。大阪へ行く時阪神電車で淀川の鉄橋を渡ると途端に空が曇る。この地区の数多い中小企業の工場に林立する煙突からの煙によるものであり、その燃料の石炭は何れも九州、四国、或は輸入されたものを神戸港で運搬船に積み替えて大阪港に運んだ。

当時、日本の輸出品の第一位は二位と格段の差で綿製品であつた。鉄鋼製品は、まだ輸入の段階であつた。大阪地区は東洋紡、日本紡、呉羽紡等の根拠地であり、これ等の工場の製品は何れもこの運搬船で神戸港に輸送され、大型船舶に積み替えて総て中国へ輸出された。

この様に往復の貨物が多量に存在したので運搬船も数多く、後から後へと続いて姿を現していた。因に鐘紡はその拠点を関東の鐘ヶ淵から神戸に移した。

五、自作農の経験

並びにその時の台風に関連しての鵞塚

戦争と共に食糧事情が逼迫して、年貢として納まっていた米俵が金納に変わって行った。已むを得ず自作農を考え、偶々小作に出してない一畝（三十坪）程の小さい田圃（田地）が残っていたので、これに水を引入れ苗を植えて丁寧（ていねい）に草取りも続けた。昭和二十年終戦の年である（昭和十九年の記憶違い以下、台風の名称も同様で、茂義氏自身の補注参照）。処が、有名なジェーン台風の襲来で稲が皆倒れ全滅した。翌年、これ又室戸台風の直撃を受け、田に海水が入り丁度穂に花が付いた時であったので花粉が散ってしまい、二、三日後穂が白く変わり枯れた。その明るる年、昭和二十二年漸く僅かながら収穫することが出来た。

室戸台風と云えば次の様な思い出がある。芦屋の業平橋に鵞塚と云うのがある。鵞が黒雲に乗って稲妻を光らせ、雷音を轟かせて御所の屋根に飛び乗って来た。源三位頼政が暗い闇の中、すかさず強弓を以て矢で鵞を射落とした。大きな音を立てて屋根から転ろげ落ちたので、家来の猪の早太が真っ暗い中を音の方向に走って行った処、思わず左近の桜に突き当たったが、駆け寄り鵞の首を打ち落とした。死体は桂川に捨て



写真4 鶴塚
 (天保7年「撰津名所旧跡細見大絵図」)

られ、流れ流れて芦屋の浜に打ち上げられ、鶴塚となった由来がある。
 室戸台風襲来の時、京都の奥にある清滝も大きな被害を受けた。旅館の従業員が清滝川に流された。その遺体が保津川に流れ込み、桂川を経て淀川に流され遂に海に入る。これが海流に乗って芦屋の浜に打ち上げられた。

芦屋の浜に打上げられて鶴塚となった不思議な漂流コースの実証が、この室戸台風による清滝からの漂流事実を以て現実に証明された。これは学友故安村慶次郎君の実証であり信ずべきものと思う。業平橋は今は海辺より遙か上の方にあるが昔はこの辺りまで海辺であったのかも知れぬ。

註 この度拙書をご覧下さって訂正すべき箇所の参考資料（国立天文台編理科年表）を送っていただきました。それにより自作農を始めたのは終戦の前年昭和十九年とし台風の呼称を次の通り訂正いたします。

ジェーン台風 昭和十九年十月七日 台風（呼称なし）

室戸台風 昭和二十年九月十七日 枕崎台風

昭和二十一年は台風襲来無く収獲することが出来ました。

当時我々の中学校の教育は受験勉強だけのものでなく、人格養成を重視して訓練するところであった。その中には円満な人格を作るために笑いの部門も設けていたのだろう。狂言・川柳・狂歌などが国語の教科書の中に出て来た。

その暗さ早太桜に突き当たり

既に記載した通り猪の早太が大きな音を立てて射落とされた鶴を捕らえようと前後を忘ぼろずる闇の中を走り、暗さのため思わず左近の桜にこれも大きな音を立てて突き当

たった（鶴は梅若謡本第一七巻参照）。中学生にユーモアのセンスを教え込む狙いである。この読本には早太の川柳の次にこの狂歌が続いていた。

早蕨さやどりが握り拳を振り上げて

山の横面つら春風ぞ吹く

狂言では大藏流の茂山師の狐の出る狂言「釣り狐」を講堂で演じてもらった。子狐がキョキョと叫びながら飛び廻る。これを真似て廊下をキョキョと飛び廻ったことが記憶に残っている。

平成六年（一九九四）七月一日（火）「朝日新聞」天声人語に「川柳が高校の国語教科書に登場するそうだ。来年度から使われる教育出版の高校国語Ⅱに作家田辺聖子さんの随筆「川柳でんでん太鼓」が引用され箕面市に住む杉本一本杉さんの川柳が紹介される。（天高く月夜のカニに御座候）と云う句だ。月夜のカニは月光を恐れて餌をあされないので肉がつかないと、杉本さんは小さい頃父親から教えられた。瘦うせていたので月夜のカニともからかわれた。」と記載されている。

漸く川柳が高校の教科書に出て来るようだが我々の中学では既に川柳は狂歌と共に教科書に載っており、ユーモアの育成による人格養成が早くから配慮されていた。

六、当時の神楽町

昔に返り記憶を辿つて懐かながらも神楽町（今の深江南町一丁目）につき記載して行きたい。先づ私の神楽町の住いの近くから書き始めると、湯川寛吉氏から始まる。氏は住友本社の総理事として住友の事業を全般に亘り担当し、遂行した。神戸高商の大先輩である。岡橋愛子さんは小池姓を通じてのその孫娘である。お邸の前の通路を隔てて、その所有地である広い地域に、梅、桃が沢山植え込んであり、その各々の季節には、夫々の綺麗な満開を見ることが出来た。

次は楢西邸となる。少し海岸の方へ進んだ所にあつた。私の学友楢西誠治君が住んだ所であり、小学校時代、彼はここから本庄小学校に通つた。神楽町は深江の東のはずれにあり、長い道程の通学である。私は本町の自宅から通つたので比較すると随分長距離通学である。その時、私はこの小学校の担当、石田先生の紹介で途中早く御影師範附属小学校へ転校したので、その後の小学校時代の友好には記憶にも無い程だが、

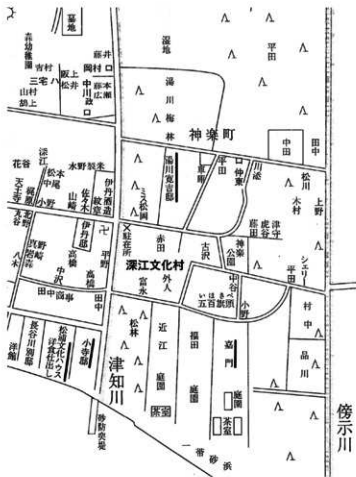


図4 昭和10年代前半の神楽町界隈の回想図
(昭和13年本庄小学校卒業生による)

神戸高商の時代となり初めて親交を得ることとなった。彼は昭和四年卒業し、日新火災への就職と共に会社関係の住宅に居を移した（あとは実兄―三和銀行勤務の大先輩―が住んだ）。その後彼は社長を長く勤め、部下との交流を深めるために色々と心を配り、麻雀を以てその一方策としていたことも有名であった。彼の本社が大手町の交差点にあり、或時その付近で偶然彼に出会い、一緒にお茶でも飲もうかと云ってくれたので、珍しい事と感じながら三菱ビルの地下に付合った。妙にしんみりと話し出した。

「五、六才の頃、付き添ってくれているおばさんに手を引かれながら君の住まいの松林に沿っている横の道を通って家に帰り着いたものだ。二人だけの淋しい暮しだった」と回顧してしんみりと語った。彼のその思いが私の胸に深く浸み入った。榊西家は大阪西区新町の大手の間屋（何の商売か失念した）。このおばさんはお妾さん（妾）だった。この事情を当時私は既に薄々知っていた。この時より暫くして彼は癌で入院したので、これが彼との最後の会合となった。彼はこの入院中も毎日必ず業務報告を受け続けていた由、聞き及んでいた。

昔を偲べば、彼は非常に若々しく元気で頼もしい男だった。我々の同期の集合があるといつも、「お前達の弔詞は俺が読んでやる」と自信たっぷり云っていたのだがこ



写真5 小寺源吾邸の外観



写真6 小寺源吾邸の居間

んなに早く亡くなるとは予想もしなかった。

次は小寺邸、小寺源吾氏は大日本紡績の社長だった人。当時の大日本紡と云えば東洋紡と並んで他の紡績会社とは格段の相違の超一流の存在であった。息子の大次郎君は御影師範附属小学校の同級生だった。大次郎君は三井銀行に就職したが、弟は長くユニチカの社長を勤めた。住吉の観音林に邸宅があり、遊びに行くとお母様の心を籠めたもてなしを受けた。深江の臨海に別荘を造られたのは、海水浴が主な目的であった。芦屋の浜は小石が多く白砂の海岸とは言い難かった。

最後に嘉門邸、海岸より少し離れて東西に伸びる静かな通りがあり、両側に立派な



写真7 昭和4年ごろの深江から芦屋にかけての海岸
防波堤が切れ砂浜になり海水浴客もいる
(昭和5年「神戸高等商船学校卒業アルバム」から)

別荘が見られた。何れも大阪の実業家のものであった。中でも道の南側に広い敷地の立派な別荘があり、嘉門さんと記憶する。どの様な方であったのか知らなかったが、ここに書き落とすことの出来ない程の立派な別荘邸宅であった。

阪急電車神戸線の開通は昭和の初期であり、それ以後阪神間の山手に急激な開発が進み、別荘地として又住宅地として大発展したが、それ迄は阪神電車沿線の芦屋の平田町、公光町、深江の神楽町だけがその対象となっていた。因に阪神電車は明治三十八年（一九〇五年）の開通である。



写真8 写真4 明治40年ごろの阪神電車青木駅
(神戸新聞総合出版センター蔵の絵はがき)

七、深江の水

本町にあった本宅には勿論井戸はあってポンプで汲み上げていたが、飲料、台所用には、一段深い層の湧き水を噴き出させ、これを掘り抜き井戸と云ったが通常「掘抜き」と簡略化して呼んだ。噴き出した水を横にある大きな矩形のコンクリートの水槽に引入れて貯水する仕組みになっていた。この湧き水は深い層からのものであるのに金気があり、味には関係は無いが触れている物に次第に薄茶色が付く。擦れば直ぐ落ちる。阪神間のこの掘り抜き井戸による水は必ず金気を伴っていた。

この湧き水は六甲山系より芦屋の溪谷に流れ込み、再び地下に潜って細かい砂利層で濾されて湧出してくる。清澄な水で銘酒灘の生一本の素地となる「宮水」の系統であるから硬水であるが、多分の炭酸分を含む鉱水であり、お蔭で天恵の「水の味」を味わっていた。花崗岩で構成されている六



写真9 深江の井戸
(深江南町3、今倉家)



写真10 深江の井戸
(深江南町3、藤本家)

甲山より芦屋川に流れ込む水は花崗岩を構成している三種目の石英、長石、雲母が夫々崩壊して出来た砂利の層を通して来たものであり、非常にきつい硬水であった。例えば、洗濯したタオルなどパリパリに乾き上げられ、そのまま顔を拭くことが出来ず必ず一度揉み解いて使っていた。

宮水については深江など灘五郷は臨海の地であり、その海岸からの地下浸水が宮水に溶け込む。この海水は長期に亘って構成された貝殻の積層を渡し通って出て来る。従って、カルシウム分を含有し、これ又、硬水である。上からと下からとの強い硬水による井戸水が灘の銘酒の原料となる宮水である。これは京都大学の研究によるものと記憶する。

昭和十四年頃、住居は神楽町にあった。松林に囲まれた所であったが、その西側通路の出口に黒田さんの住居があって、その井戸へ冬の酒醸造期には馬力によるタン

ク車が引つきり無しに、その井戸水を運んでいた。主として西の方への運搬だった。東方面は直接西宮の宮水を汲んで運んだのだろう。何れにしても、この辺の井戸水は総て酒醸造の原料水となり得る硬水であった。

昭和七年、学校を卒業して愈々就職が始まり、大阪勤めとなった。この時飲む水は淀川水源によるものであり、その不味さには、驚き入った。流石に六甲の水は味があると感銘した。当時水道に依る給水が原則となっていたが武庫川水源であり、上が原（西宮の山手）に浄水場があった。神戸市は生田川水源であり、布引の滝が水源地であった。そのあと人口増加に伴い、次第に淀川の水を引き入れる淀川水源に頼るようになった。

その後、昭和三十五年頃、勤めの関係で京都住まいが始まった。その頃僧房などを訪れると、実に薫り高いお茶を出していただいた。私が五、六才の頃、祖父がお客さんのある時、私を傍らに呼んで一緒に煎茶一服飲ませてくれた。その味を心得て、その後も玉露茶の質を充分吟味しながら茶を点てるのだが、この僧房の薫り高いお茶には及ばないとつくづく思った。矢張り加茂川の水のせいだろう。

秀吉が茶を点てるため、わざわざ宇治川の水を汲ましたという場所が宇治橋の欄干

の出っ張りに「三ツ間」という名で遣されている。

水の性格には我々が常に拘ますべきものがある。「水は方円の器に随う」とか「如水の交わり」とか我々常に心得るべき数々のものを示唆してくれる。殊に年が進んで来ると、如水交など全く魅力的な言葉である。別に話の穂を繋がなくとも、ただ会っておれば楽しいと云う様な交りは最高の交りと思う。友との交際も次第にかくありたいと思ふ。

ギリシヤ神話ではヴィーナスは海水から生まれる（ポツテイチェリ Botticelli の名画で知っているだけだが）。ゲートのファーストには「すべては水より生じたり。すべては水にて長らえん。」とある。誠に、水は生物の母である。

生物が海で発生し、水を含みながら陸へ上がって来たということは生物の含水量の多いことでも明白であり、これが現在の定説のようだ。人間の生命も、水で成り立っている血液の上に浮かんでいる物質であると云い得るのではなからうか。

然し、水それ自身は生命を生長せしめるものではない。これは生命の中に存在する独自の自我、自覚に依るものであり、各自の努力を以て果し得るものであるということを承知せねばならない。お互いに頑張ろうではないかと云うことである。

後書

昔、深江村は阪神間で遜色せきじやくのない村であった。何れの市町村も海辺の地から発展して行つたものだが、特に深江は田作りの出来る地域で、当時は他の地域（殊に芦屋は芦屋川により六甲山の花崗岩の流砂で覆われ、田畑は極めて少なかった）に比して深江は遙かに有利な条件の下で商店街も栄えたが地域には限度がある。次第に山手の地区へ視線が向けられていき、殊に芦屋の伸展は、阪急電車開通と共に目覚ましいものがあった。

従つて深江も一時衰退の時代があつたが、阪神大震災のあと急激に伸展の状況が現れてきた。神戸の中心復興が思うに任せず、更に山手の開発が一応の限界となり、そのために臨海の埋立てが進展し、今後引続いて活動しようとする力が自然この地に向けられてきた。個人の住居需要は勿論のこと、企業の発展基盤の対象にも欠かせない地区になつてきた。

深江の伸展を念願しながら筆を措く。

平成十年二月二十四日

岡田茂義 記

解題 「深江の心象風景」と岡田家の歴史

大國正美

はじめに

岡田茂義氏の「深江の心象風景」は優れた回顧録である。しかし法事に参加したごく少ない身内に配られただけで地元でも読んだことのある方はほとんどいない。このため神戸深江生活文化史料館の「生活文化史」第四九〜五二号（二〇二二〜二四年）で、四〇年かけて収集した古写真も併用して復刻した。さらに三女の福田誠子さんのご支援で、それを一書にまとめることになった。本稿は回顧録の解題として筆者岡田茂義氏の紹介を行うとともに、合併前の歴代本庄村村長を輩出してきた岡田家の系譜と地域の中で果たしてきた役割を明らかにしたい。

1 岡田茂義氏と「深江の心象風景」

一、茂義氏の略歴

岡田茂義氏は、明治四十年（一九〇七）二月、本庄村村長を務めた岡田茂左衛門の二男として生まれた。明治三十六年生まれの子正敏は一歳余りで早世していたので、両親からとても大事に育てられた。御影師範学校の附属小学校（現神戸大学附属住吉小学校）、旧制北野中学を卒業、旧制神戸高等商業学校に入学、同校は昭和四年（一九二九）に官立神戸商業大学（神戸大学の前身）に昇格したため、その第一回卒業生となった。

卒業後三和銀行に入行、はじめは大阪西支店など関西で勤務したが、昭和二十九年、東京・内幸町支店長となり上京、昭和三十二年大阪の堂島支店長、昭和三十五年京都支店長などを歴任、監査役を経て東洋不動産の常務取締役、日栄証券の専務取締役などを務めた。堂島支店長時代は夙川に、京都支店長時代には京都に支店長社宅があり、関西勤務の時期も深江の自宅を空けることが多かったようである。

最初の妻は姫路市豆腐町、山本寿雄の二女知恵さん（一九一三～一九四三）。早世したため井上忠也陸軍中將の二女、よし子さん（一九一九～二〇一三）を後妻として迎えた。

話者の三女福田誠子さんは、昭和二十四年、芦屋の病院で生まれ、昭和二十九年に東京に転居、夙川の支店長宅を経て深江に戻ったのは昭和三十三年ごろで、田んぼが家の前に広がっていたという。このころは正月に行員を三〇人ほど招待するのが慣行になっていた。二階の和室では古い煙草盆（写真1）が使われ、聞き取りを契機に、神戸深江生活文化史料館に寄贈いただいた。

しかし誠子さんも深江での生活は長くはなく、昭和三十五年には京都の支店長宅に、



図1 1957年の岡田茂義邸
道路を挟んで西側は田んぼだった



写真1 深江の岡田茂義氏邸で使われてきた
煙草盆

昭和三十六年には神戸女学院中学の寄宿舎に入り昭和三十八年には再び東京に引越すことになる。

二、小磯良平との交流、

絵画・音楽に親しむ

茂義氏は、大学時代にチェロに親しみ卒業後も続け、サンサーンスの「白鳥」を弾く腕前で楽譜が残っている（写真2）。今回所蔵の楽譜と一緒に神戸商大音楽部後援会主催のセロ演奏会のポスターが見つかった（写真3）。七月四日金曜日とあるので、昭和五年（一九三〇）だろう。NHK交響楽団の会員で晩年もよくコンサートに通っていたという。ゴルフが趣味で九〇歳を超えてもコースを回り、シングルに近い腕前だった。ドイツのカ



写真2 戦前のチェロの楽譜



写真4 小磯良平から直接
入手した作品



写真3
セロ演奏会ポスター。
神戸新聞社後援

メラ、ライカに凝り、イギリスの高
級車ジャガーに乗るなど、ハイカラ
なシテイボーイだった。

深江文化村を介してか、神戸市出
身の洋画家小磯良平（一九〇三〜
一九八八）とも知己を得た。小磯良
平が大阪府出身の洋画家、田村孝之
介（一九〇三〜一九八六）と台湾旅
行に行く際に資金が不足。茂義氏に
絵画購入を依頼し「君は僕の最初の
パトロンだ」と言わせたと伝える。
その絵画は深江の茂義氏邸に飾られ、
現在は福田家に受け継がれている
（写真4、5、6）。その後収集したマ
リー・ローランサンの絵画をはじめ、



写真5 小磯良平の作品。年代は1933年



写真6 小磯の作品。年代は1934年

茂義氏の使った机や書棚、茶器も福田誠子さんが引き継いでいる（口絵写真2、3）。
誠子さんは、夫福田仁司氏が日銀ニューヨーク事務所勤務時代に、ニューヨーク市マンハッタン区にあるフリック美術館を見学、岡田茂義氏邸での生活と共通性を感じ

たという。フリック美術館は、実業家のヘンリー・クレイ・フリックの個人コレクションを、

邸宅だった館で展示公開している。小規模だが充実した所蔵品で知られ、絵画のほか彫刻・家具・陶磁器なども含まれている。誠子さんは「美術品は美術館、博物館に展示するのもいいが、生活の中で美術品を楽しむことの豊かさに共感した」という。誠子さんは留学生支援活動をライフワークにしている、ひな祭りなどに毎年自宅に三〇人ほど招待、日本の伝統的な家庭の文化を紹介している。正月に部下の行員を招いてきた茂義氏邸での年始の風景に重なり合う。「深江の岡田家」の形を変えた継承というのが動機の一つという。

三、戦災と進駐軍将校の居住

第二次世界大戦による敗戦で日本は連合軍の占領下に置かれ、岡田茂義邸の大部分は進駐軍が接収、岡田家一家は一階で生活した。接収されたエリアにオーストラリアのケントウエルという将校が家族連れで住み、バーバラという女の子は、岡田家で飼っていたバブという名の犬を、一緒に可愛がってくれた。戦後の食糧難のためか広い庭に鶏を放し飼いにしていた（写真7）。ケントウエル氏は紳士的な態度で接し、誠子さんが生まれたときにニットの子供服をプレゼントしたという。接収下での進駐軍と日

本人の交流を物語る貴重なエピソードである。

戦災と戦後の農地解放、富裕税対策、借家・借地への占拠への対応など、岡田家は大きな課題に直面した。しかし東京在勤時代の茂義氏は十分対応できないことがあり、固定資産税の支払いが滞り銀行の給与の差し押さえをされたこともあったという。こうした結果に、よし子さんの叔父で住友銀行頭取を務めた岡橋林からサラリーマンの心得を諭されるといふ笑えないエピソードもある。

昭和三十三年ごろに深江に戻ってからは、所有地の占拠者に対し、一件ずつ権利問題を解決していった。とはいえ茂義氏は勤めもあり、よし子さんが宅地建物取引主任の資格を取り、弁護士と一緒に対応したという。



写真7 深江の岡田茂義氏邸の南側の庭

四、阪神・淡路大震災への対応

もう一つの苦難が震災からちょうど半世紀たって起きた阪神・淡路大震災だった。平成七年（一九九五）一月十七日に起きた震災では深江地区は阪神高速道路が横倒しになるなど、甚大な被害に遭った（写真8、9）。祖父岡田正蔵が大正十三年（一九二四）に大日霊女神社に寄進した狛犬も全壊した社殿の下敷きになった。幸い台座が残っていた



写真8 震災で全壊した大日霊女神社



写真9 震災で全壊した正寿寺

た。幸い台座が残っていた

ことから、茂義氏が狛犬を再び奉納、震災を乗り越え狛犬が守られた。台座にはその旨が記載されたプレートが付けられている（写真10、21頁参照）。

震災後、福田誠子さんは八〇歳近いよし子さんと九〇歳目前の茂義氏とともに何度も深江に通った。倒壊して犠牲者が何人も出た木造アパートから道に投げ出された布団の異様な状況は目に焼き付いて離れないという。

震災復興を促進するため、地主が倒壊した借家を建て直さない場合には、借家人の借家権が借地権に代わるという、地主の権利を制限する震災特例法が成立、岡田家は深江に所有する土地への対処を再び求められた。

誠子さんは茂義氏と一緒に深江をめくり、初めて深江と自らを結びつける故郷になっ



写真10 岡田正蔵いく夫妻が寄進した狛犬。震災で台座を残して壊れ茂義氏が修復した。金属のプレートで由来が記載されている

たという。茂義氏は「ここは昔、蓮の池だったんだが、おじいちゃん（父・茂左衛門）が養子やったからかな、自由になるお金が思うようになかったのか、朝早くからここにきて、舟をだしてレンコン取りしてはったんや。ここは深江のためになることに使いたいんや」と言っていたという。

震災犠牲者の三回忌に当たる平成九年一月十七日に、慰霊のため茂義氏は正寿寺に親鸞聖人像を寄贈した（46頁参照）。茂義氏が正寿寺住職と像についてあれこれ話し合おうのを傍で聞いていて、誠子さんは茂義氏が、深江の人であることを強く感じたという。なお親鸞像は当初東面していたが、現在は本殿を背に、南面している。

五、阪神・淡路大震災の被災を免れた旧宅

岡田茂義氏の邸宅が昭和十三年（一九三八）に旧神楽町（現深江南町一丁目）に建設された（口絵写真4、7）。阪神間モダニズムや、深江文化村に立てられた洋館に影響を受けたと思われる洋風建築だが、日本の風土に合わせた和風の要素も取り込んだ。母屋は震災でも大きな損傷はなく無事だった。

邸宅は木造二階建て、一階六五坪（二一五平方メートル）、二階四〇坪（一三五平方メートル）。



写真11 岡田茂義氏邸の食堂（辻照男氏提供）



写真12 暖炉を備えた居間（同）

スバニツシユ瓦葺きで大林組の施工である。一階にホール・食堂（写真11）・居間（写真12）・書斎の洋室がそれぞれ暖炉付きで配置され、茶の間・老人室は和室の和洋折

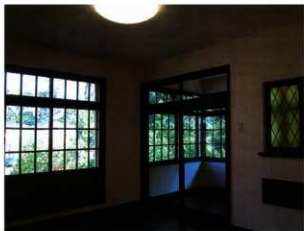


写真13 サンルームを備えた子供部屋（同）



写真14 階段ルームと
スタンドグラス（同）

裏。二階はサンルームを前面に設けた子供部屋（写真13）が洋室で、寝室・床の間の客室、次の間は和室になっていた。階段（写真14）や玄関にはスタンドグラス、しゃれた照明（写真15）があった。芝生庭に面する南面には、サンルーム・広縁・ロジア（囲まれた半屋外の庭のスペース）などが設けられ、太陽光の季節変化をうまく取り入れられる。張り出た軒は雨の多い日本の風土に合わ

せた。

当時深江周辺には深江文化村をはじめ洋館が相次いで建てられており、こうした洋館建設ブームを反映しながらも、壁面や瓦の色調は落ち着いており、別荘で



写真 15
しゃれた照明(同)

はなく本宅として設計されたために和風の要素を多く取り込んでいる。昭和前期の名望家の住まいの一例を考えるうえで貴重な建築物である。茂義氏の孫の福田卓矢さんは、関西の大学に進学、一時この家に住んだ。

阪神・淡路大震災では隣接の和風建築物は被害が大きかったが、本宅は東西に長い構造だったことが幸いして甚大な被害を免れた。一時は解体・売却も検討されたが、建築家辻昭男氏の助言と岡田茂義氏の英断により保存修復されることになり、平成十四年(二〇〇二)四月から検討が進められ、同年十二月大林組が修復工事に着手した。瓦・外壁・建具・床タイル・暖炉・ステンドグラス・木軸・ガラス・樋・門扉の各部分を修復、再利用するため電気引き込み・給排水・ガス設備の更新も行い、翌平成十五年三月に完工した。

2 近世（明治前期）の岡田茂左衛門家

岡田茂左衛門家は江戸時代に漁業に携わり、中期頃から網屋という屋号を使い、深江村の庄屋・年寄など村役人を代々務めてきた。この章では江戸時代から明治期前半までの岡田茂左衛門家のあゆみをたどる。なお九代目までは歴史上の人物として敬称を略し一〇代目岡田茂義氏から敬称を付けることにする。

岡田茂左衛門の旧邸宅（10頁に平面図）は字島之内（現深江本町三丁目）にあり、もとは新道に面していたが、北側に新たに邸宅を立て、八代目正蔵の弟善蔵が茂左衛門家の本宅に住み、分家南岡田家となった。

北側の岡田茂左衛門宅は戦災で焼失、焼け残った南側の岡田善蔵旧宅は戦後国道四三号線の用地にかかったため、曳家工法によって北側の岡田茂左衛門家の跡地に移された（13頁写真1）。建物は阪神・淡路大震災で全壊したものの、善蔵の孫の岡田堯至氏は震災前にこの家屋の東側に補強を兼ねて増築していたため、今も岡田茂左衛門家の故地に住まい続ける。

一、初代く七代の系譜

昭和十七年に本庄村の囑託として村史編さんに着手した松田直市が筆写した岡田家の系図が複数残っている。これをもとに作成した岡田茂左衛門家の系譜は以下の通りである。

◆初代茂左衛門 生没年不詳。妻は正徳四年（一七一四）没。

◆二代茂左衛門（？く一七二四）。妻（一六六四く一七三四）。

◆三代茂左衛門（一六九一く一七五〇）。六〇歳。

妻は中野村仲右衛門の娘（一六九七く一七六八）。

◆四代茂左衛門（一七二一く一七九七）。七七歳。

網屋を屋号として、石碑に記載された人物である。初名彦三郎、深江村の岡源左衛門の二男。茂左衛門の養子となって宝暦元年（一七五一）家督を継ぎ農業・漁業で家運を隆盛に導いた。天明七年（一七八七）に深江村年寄となるのが村役人としての初見。明治二十九年（一八九六）に武庫郡長阿部光忠が文を作り自ら筆を執った顕彰碑が岡田堯至氏宅に現存している（写真16）。この石碑は、元は北側の岡田茂左衛門邸の南壁際に立っていたが南岡田家住宅を岡田茂左衛門邸跡地に曳行した際、南岡田家敷

地内の石碑になった。石碑は高さ一五三センチ、横九一センチある。以下碑文を引用する。

網屋茂左衛門之碑



写真 16 武庫郡長阿部光忠による
網屋茂左衛門顕彰碑
(深江本町三、岡田堯至氏宅)

の岡源左衛門の二男にて享保六年に生る、宝暦元年網屋茂左衛門の後を承けその名を襲て曾孫のときに氏を岡田と改む、それか子そいまの正蔵にはありける、茂左衛門若きときよりたなつものつくるわざ

に力を尽し、かたはら海幸に心をよせて勉勵みしかば人にしらる、富人とはなれりけり、されと聊も奢る事なくつ、まやかにして常に貧しきものに恵むをもて樂とせり、明和八年邨の正寿寺を造替するにその事にあつかりていたく力を尽しはた程に過ぎたる金を施入せり、これ他の勳進をそかむとの心なりしとそ、さればいたく邨人にゐやまはれけり、かくて寛政九年十月十八日身まかりぬ、齡七十(本註)まり七になむありける、正藏このころおのれにいへらく、わか家のこの邨にてかすまへらる、ハ全く五代の祖の功なり、そのいさをはもとよりうみの子のつきく遠き世に語りつくべけれど、猶永代のしるしに石碑をたておかまほしうこそおほゆれ、いかてその文をと切に乞ふに、そはいとよき事なりと、やかてきけるま、を書しるしてさてうたへらく

うみの子の 八十つきく いひつかひ

かたりつかなむ あはれその名を

明治廿九年九月

兵庫縣武庫郡長 從七位 阿部光忠撰并書

この碑文によれば茂左衛門は富人になったにも関わらず奢ることなく貧者に恵みを与えることを楽しみとした。明和八年（一七七二）の菩提寺正寿寺の造営では多額の寄進を行った。八代目の正藏は深江村有数の有力な家にまで創り上げた四代茂左衛門の功績を後世に伝えるために郡長阿部光忠に頼んで文を書いてもらったという。

妻はたね（一七三六～一八一七）。

◆五代茂左衛門（一七五八～一八二八）。七一歳。

初名善藏、文政七年（一八二四）に庄屋となるのが庄屋としての初見。

妻は岡本村西田金左衛門の娘やさ（一七六四～一八四三）。

深江の惣氏神である森の稲荷神社（東灘区森北



写真17 稲荷神社に茂左衛門らが奉納した石造の水盤
（東灘区森北町、稲荷神社境内）

町)には、文政五年(一八二二)に奉納された立派な石造の水盤があり、それに願主の面々の中に「深江村 岡 茂左衛門」と彫られている(写真17、図2)。江戸時代は姓の頭文字だけを表記することがよくあるので、「岡 茂左衛門」は岡田家のことと思われ、網屋を屋号としつつ私的には苗字を名乗っていることが推測される。寄贈の年代から五代目茂左衛門と思われる。

◆六代茂左衛門(一七八九〜一八五二)。六五歳。宗旨人別帳は一七八八年生まれ初名林藏、後善藏、天保三年(一八三二)・同四年に庄屋を務める。

前妻きやう。後妻は生田村勝見吉左衛門の二女まつ(一八〇五〜一八八四)。

◆七代茂左衛門(一八二五〜一九〇一)。七七歳。

初名松藏、生田村榊屋甚五郎の三男。弘化二年(一八四五)茂左衛門の養子となり、文久二年(一八六二)から庄屋、姓を岡田と定める。

妻たき(一八三二〜一九一三)



図2 水盤の拓本

3 本庄村長を輩出した岡田家

一、本庄村の誕生と三代目村長岡田正蔵

明治二十二年（一八八九）に深江村・青木村・西青木村が合併して本庄村が誕生、昭和二十五年（一九五〇）に神戸市に合併するまで六一年の歴史がある。この間、一四代の村長を生んでいるが、岡田家から三人が三代・四代・六代・八代・一〇代の村長を務めた。

◆八代正蔵（一八五四～一九三四、写真18）。八一歳。

明治十年（一八七七）家名相続、明治十四年深江村戸長、明治十五年第九戸長役場（深江・森・津知・三条・芦屋）戸長、明治二十七年十二月三代目村長に就任、明治二十八年十二月退任した。

妻いくは日西原村（神戸市北区）湖上儀三郎の長女（一八五八～一九四三）。



写真18 岡田正蔵

正蔵は妻の出身地から三田米を仕入れて酒造業を営み「正蔵」という銘柄の酒を作ったが、温度管理に失敗して醤油醸造に切り替えたという。

岡田正蔵は信仰心が厚く、明治から大正にかけて、深江の大日靈女神社や森の稻荷神社、正寿寺に灯籠や玉垣などを相次いで寄進した。確認されている中で最も古い寄進は、明治十八年（一八八五）の森の稻荷神社玉垣（写真19）と、東岡田家と連名での正寿寺井戸枠である。以降の寄進の状況は表の通りである。大正十三年（一九二四）には、深江の大日靈女神社（通称大日神社）と森の稻荷神社に狛犬を奉納した。この二つの狛犬は妻いくと連名で、夫婦そろって名前を刻むのは珍しいのではないか（前掲写真10）。



写真19 岡田正蔵が寄進した玉垣（明治18年、稻荷神社）



写真20 野間門人中が建てた灯籠
岡田正蔵は世話人（同）

岡田茂左衛門家ゆかりの石造遺物など

設置場所	西暦	表題	刻名者
本庄公園	1939	深江土地区画整理組合	組合長岡田茂左衛門
本庄墓地	1944	磯野萬治郎顕彰碑	岡田茂左衛門
正寿寺	1885	井戸杵	本岡田／東岡田
	1997	親鸞聖人像	岡田茂義
大日靈女神社	1908	石燈籠	岡田正蔵
	1922	玉垣寄付芳名録碑	岡田正蔵・岡田正市
	1924	狛犬	岡田正蔵・いく (岡田茂義修復)
	1934	皇太子誕生記念大鳥居 奉献者芳名録碑	岡田茂左衛門
	2013	玉垣	岡田茂義・よし子
森の稲荷神社	1822	水盤	岡田茂左衛門
	1885	玉垣	岡田正蔵
	1894	石燈籠 (野間門人中)	岡田正蔵／野村平兵衛
	1910	石燈籠	岡田正蔵
	1916	石燈籠 (保存講)	世話人岡田正蔵ほか
	1911	狛犬	岡田正蔵
	1924	狛犬	岡田正蔵・いく
岡田堯至氏宅	1896	網屋茂左衛門顕彰碑	武庫郡長阿部光忠

また稲荷神社に明治二十七年（一八九四）に奉納した灯籠は「野間門人中」が建てたもので、岡田正蔵は野村平兵衛とともに世話人となっている（写真20）。「野間」とは天保七年（一八三六）ごろ播磨国小野（小野市）から深江に来た寺子屋の教師野間本造で、漢籍・珠算・書道を村人の子弟に教えた。学徳に優れ慕う人が多かったが、慶応年間（一八六五～六八）に病死した。墓は死後しばらく経って明治十一年に建てられた。岡田正蔵は安政元年（一八五四）深江生まれなので、野間本造に読み書き



写真 21 保存講灯籠
岡田正蔵は世話人(同)

を習ったのだろう。

さらに明治十八年の玉垣の北側に石灯籠(写真 21)があり、「本庄村史」編纂時には「献燈」「保存講」「世話人岡田正蔵」

と読んだが、樹木に覆われて調査が不能だった。令和二年に改めて調査したところ、「大正五年三月五日満年記念」と解説することができた。ただ保存講の詳細については不詳である。また世話人はほかにも名前が刻まれているが陰刻が浅く、踏み段が設けられ判読ができない。

二、分家・南岡田の創設と岡田善蔵の活躍

岡田正蔵が明治二十八年本庄村村長在職一年で退任の後、跡を引き継いで四代目村長になったのは、正蔵の弟で分家南岡田家を興した岡田善蔵(写真 22)である。正蔵から後継指名されたと伝える。

岡田善藏は、四代、六代、八代の三回にわたって村長を務めた。武庫郡郡会議員、郡会議長も歴任し地方政治一筋に生きた人物である。

岡田善藏の経歴については、昭和十七年（一九四三）ごろから本庄村史の調査に当たった松田直市の手書きのノート（以下「松田ノート」）や、善藏の孫・岡田堯至さんが保存してきた岡田家文書に岡田善藏の履歴書が含まれている。

◆岡田善藏（一八六二―一九三七） 数え七六歳。



写真 22 岡田善藏

七代目岡田茂左衛門松藏の五男として文久二年（一八六二）十一月五日生まれた。幼いころ岡本村に養子に出るなどしたが、結局深江村に戻って分家を興し、南岡田家の祖となった。明治二十年（一八八七）数え二六歳で深江村村議会議員に当選したのを皮切りに、表のように公職を歴任した。

明治二十六年の早魃で、芦屋川の水車業者と東川用水に頼る本庄地区五カ村との間で訴訟があり、善藏は仲介を果たした。この紛争の全容を示す史料はないが、訴訟は長期間にわたり郡政にも支障を来たし、当時の土橋多四郎郡長が調停を試みたが失敗。

表・岡田善蔵の公職略歴

明治 20 年	1887	12 月 22 日	深江村村会議員当選
21 年	1888	2 月 18 日	深江村外三ヶ村連合会議員当選
		3 月 29 日	深江村総代当選
		5 月 25 日	深江村外三ヶ村勸業会員当選
22 年	1889	4 月 25 日	本庄村村会議員当選
25 年	1892	4 月 18 日	本庄村村会議員選挙につき選挙掛選任
28 年	1895	12 月 2 日	本庄村第 4 代村長当選
32 年	1899	12 月 9 日	本庄村村長退職
34 年	1901	3 月 24 日	本庄村第 6 代村長当選
36 年	1903	7 月	家事の都合により本庄村村長辞任
		9 月 30 日	武庫郡郡会議員当選
38 年	1905	12 月 7 日	武庫郡名誉職参事会員に補充
40 年	1907	6 月 18 日	本庄村第 8 代村長当選
		9 月 29 日	武庫郡郡会議員満期退任
44 年	1911	6 月	本庄村村長再選
		9 月 30 日	武庫郡郡会議員当選 (御影町選挙区)
大正 2 年	1913	6 月	家事の都合により本庄村村長辞任
4 年	1915	9 月 30 日	武庫郡郡会議員当選 (本庄村選挙区)
6 年	1917	1 月	武庫郡郡会議長当選
		4 月	本庄村村会議員当選
8 年	1919	10 月 30 日	武庫郡郡会議員当選 (本庄村選挙区)
10 年	1921	1 月 29 日	武庫郡名誉職参事会員に補充 (1 年間)
		4 月	本庄村村会議員当選
12 年	1923	3 月 31 日	郡制廃止により郡会議員失職

同二十七年十二月に郡長になった阿部光忠は、善蔵の力を借りてようやく円満解決させた。阿部郡長は、明治三十年九月「当時ノ状ヲ追想」、芦屋川水利功勞として銀杯を贈っている（「松田ノ一ト」四卷五五頁）。

明治二十八年十二月、兄正蔵の後を受けて第四代村長に就任した時には、数え三四歳の若さであった。明治二十九年御影町外八ヶ町村組合立苑

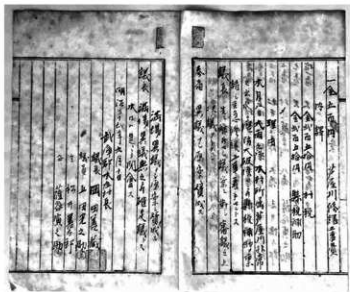


写真 23 岡田善藏村長時代の本庄村会議決書
芦屋川修復を承認 (1899年、岡田堯至氏文書)

原高等小学校の開校に協力、同三十二年三月、学校管理者でもあった阿部郡長は善藏に銀杯を贈って感謝の意を表している (同四卷五九頁)。

明治三十二年十二月に村長を満期退職するが、一年余り後の明治三十四年三月に六代村長に当選した。第六代村長時代には、一五〇〇円余りをかけて本庄村役場を新築した。明治三十五年一月四日の開庁式での善藏の答辞には、「近頃経済界ノ不振、財政ノ困難ヲ呼フノ声大ナルニ際シ、此ノ建築ノ工ヲ起シ、以テ

人民ノ負担ヲ重カラシムルハ、不肖ノ最モ深ク且厚ク嘆慮セル所タリシモ、從來借家ノ不便ト不経済ニシテ本村永遠ノ不利タルヲ悟リ……とある。村財政は不振だったが、それまでの庁舎は借家で、不便なうえ不経済なため、財政上の困難を乗り越えての建設だった（同四卷八三頁）。明治三十六年には青木字大倉田一七九に避病院を新設した。しかし同年七月、任期途中で村長を辞任、履歴書には「家事ノ都合ニヨリ」としか書かれていない。

そのわずか二カ月後、明治三十六年九月、岡田善藏は今度は郡会議員に当選した。そして明治四十年六月、第八代目村長に返り咲いた。このとき郡会議員を兼務していたが九月に郡会議員の任期が満了。同四十四年に村長に再選され、大正二年（一九一三）六月「家事ノ都合ニヨリ」辞職するまで六年間村長を務めた。第八代村長時代に深江国道の改修に功績があり、村長退任後の大正三年十月、この改修の功績により銀杯を贈られた（同四卷一一一頁）。

明治四十年九月には郡会議員を満期退任するが、四年後の明治四十四年には、村長在職のまま今度は御影町選挙区から当選。大正二年に町長を退任するまで郡会議員との兼任が続いた。

大正四年には本庄村選挙区から郡会議員に当選し、大正六年から一年間郡会議長。大正十二年に郡制が廃止されるまで郡会議員の地位にあった。

善藏は郡会議員引退後も深江区長などを務め、津知川改修や深江の区画整理に尽力した（同四卷一一三頁）。

明治四十三年（一九一〇）に武庫郡水産組合が作られると、善藏は副組合長や組合長を歴任、漁場争いなどにしばしば仲裁に入った。大正十年（一九二二）兵庫県水産組合連合会が法改正により改組された時、善藏は武庫郡水産組合長の職にあり、武庫郡水産組合と兵庫県水産組合連合会の両方から長年の功績を表彰されている（同四卷七四頁）。

篠田省著『自治団体の沿革』（東京都民新聞社、一九三〇年）は、岡田善藏を評して「温厚篤実人格高潔」としている。昭和十二年（一九三七）四月三十日死去。地方自治に尽くした一生だった。

三、戦時下の村長、岡田茂左衛門の足跡と反骨精神

岡田正藏の後を受けて家督を継いだのは養子の九代目岡田茂左衛門であった。

◆九代茂左衛門（一八七二～一九四九、写真24）。



写真24 岡田茂左衛門

初名正市、川辺郡東桑津村（伊丹市）林善介の四男。正蔵の女ゑいと結婚、分家東岡田を創立するが大正十二年（一九二三）正蔵の養子となり本家を相続。昭和十六年（一九四一）から四年間第一〇代本庄村村長。

妻ゑい（一八七九～一九三一）。五三歳。



写真25 玉垣の寄附芳名録碑
父正蔵と正市の連名

大正十一年の大日靈女神社の玉垣の寄附芳名録碑に、養父正蔵と連名で「正市」の名前が掘られている（写真25）。茂左衛門を襲名してからは、昭和九年（一九三四）昭和天皇の皇太子（現上皇）誕生を祝って大日靈女神社の入り口に建立された石大鳥居建立に貢献した。



写真 27 灘深江土地区画
整理組合竣工記念碑
岡田茂左衛門が組合長

し、公園や溝なども設けて近代化をしようというものだった。現在の阪神電車の線路の北部は当時大半が江



写真 26 石大鳥居の
奉献者芳名録碑

この石大鳥居の奉献者芳名録碑には、最高額の寄付者として筆頭に岡田茂左衛門の名前が彫られている（写真26）。また茂左衛門が組合長を担った灘深江土地区画整理事業は、神戸市の道路整備の都市計画に合わせまっすぐな道路を通し、耕地の区画や地目を変更

戸時代以来の田畑のままだった。権利者である組合員は二三九人の多人数に及び、深江在住者は六九人だけで神戸市から大阪市まで周辺地域に広がっていた。昭和九年に起工し昭和十二年に竣工、これを記念して昭和十四年に本庄公園の入り口に立派な竣工記念碑を建てた（写真27）。表面に岡田茂左衛門組合長ら関係者の名前、裏面に「整地記念」の文字と湊川神社の宮司が揮毫したことが彫られている。

もう一つ忘れられないのは本庄墓地にある磯野萬治（次）郎の顕彰碑である（写真28）。磯野萬治郎は、深江の旧家磯野助左衛門家に生まれ、分家した篤農家である（松田直市筆写「本庄村誌資料」第七巻）。顕彰碑は昭和十八年五月、岡田茂左衛門が碑文起草し、昭和十九年一月、有志が建立した。

- 岡田茂左衛門は磯野萬治郎の功績として①村会議員三期
②農会副会長として耕地整理・農事改良に率先垂範した
③篤農家として知事賞受賞④



写真28 磯野萬治郎顕彰碑
憲兵隊に拘束され死亡。
岡田茂左衛門が起草した

深江衛生組合長として更生施設に尽くし知事表彰——を挙げている。碑文には「村ノ先覚者・指導者トシテ郷党ノ景仰スル所ナリシニ突如トシテソノ計ニ接ス、痛惜ニ堪ヘザルナリ、然レドモ君ガ村各般ノ事ニ亘リ残シタル功績ハ永ク村史ニ伝ヘ村發展ト共ニ輝キマサン、君以テ瞑スベシ、謹ンデ弔意ヲ表ス」と最大限の称賛をしている。

しかしこの顕彰碑を建てたのはこれだけの功績のためではなく、記載されていない事実がある。磯野萬治郎は、昭和十八年川西航空機への農地売却を拒み、神戸の憲兵分隊で暴行され亡くなった。国策に協力せず憲兵隊に死に至らされた人物を、死の直後に顕彰したのである。戦時下でこうした人物の顕彰碑を建てること自体、大変な勇気が必要で、軋轢もあつただろう。あえてこの時期にこれほど立派な石碑を建てた深江の人々や「痛惜ニ堪ヘザルナリ」と明言した岡田茂左衛門には、軍国主義に対する反骨精神があふれていたのではないか。突然の同胞の不条理な死に対する怒りと悔しさが読み取れるのである。昭和二十年（一九四五）十一月二十四日付「朝日新聞」兵庫版には「恨買ふ憲兵の暴行 敷地問題で篤農家を毆殺？」という見出しで、磯野萬治郎の不審死と現場に立ち会った息子清次氏の無念のコメントを伝えている。

四、岡田茂左衛門元村長の弔辞の発見

「本庄村史」歴史編の編さんで岡田茂左衛門家への調査のため、岡田よし子さんに初めて手紙を差し上げたのは、平成十四年（二〇〇二）十月だった。東京の岡田邸に深江や旧本庄村に関わる史料が何か残っていないだろうか、と思ったのである。

突然の便りに対し、深江に強い思いを抱いておられたよし子さんからはすぐさま返

整理組合も組織も水が組合長
として長く短日時に道路
排水路の完備、整然たる
宅地造成等 本村都市
発展の素因たる正副整理の
大事業を克遂せらる。

事をいただいた。残念ながらその時は、めばしい史料調査はできなかったものの、その後、娘の上田禮子さん



写真 29 旧本庄村役場

空襲に遭ったものの修復され、神戸市に合併後に出張所、公民館として活用されたが、1992年解体

ついで昭和十六年秋冷も
戦時下本村が軍需工部
の一環として劃期的飛躍
發展途上にあるとき、選出
本村長に就任七十歳の
高齢とも頼みず、目定
ましく職務に精励、上水道
の布設、村立診療所、
村立幼稚園の創設等、
公共の事業に盡群、村民の
福利増進に専心、益々小まら
功績は洵に大なるべし

写真30 岡田茂左衛門元村長の弔辞（部分）

を伴って神戸深江生活文化史料館を訪問された。さらに平成十九年（二〇〇七）十二月に「仏壇の掃除をしていて見つけた」とのコメント付きで岡田茂左衛門元村長の弔辞を送っていただいた（写真30）。

この弔辞の発見で岡田茂左衛門（正市）の人柄や業績が明確になった。明治四十三年（一九一〇）から本庄村村会議員を三期務め、昭和六年（一九三一）に深江土地地区画整理組合の組合長となり道路や排水路を整備した。昭和十六年に軍需工場として川西航空機甲南製作所（現新明和工業）が誘致され深江が工都として飛躍的に發展するときに、七〇歳という高齢ながら村長に選ばれた。村長としては上水道の敷設、村立診療所や村立幼稚園の創設などを行ったことが弔辞に書かれていた。深江の地が都市基盤を整備する重要な時期に、戦時下にも関わらず村民の福利増進に努めたこ

とが浮き彫りになる。

昭和二十年五月十一日と六月五日、八月六日に空襲で本庄村は壊滅的な被害を受けた。その死者はそれぞれ三七一人、八人、四一人で、死者数は五月の空襲が突出していた。岡田茂左衛門村長は五月の空襲まで毎日役場に出勤していたが、役場も被災し「空襲では命からがらだった」とよし子さんに語ったという。

茂左衛門は深江だけでなく三田市などにまで及ぶ広大な所有地を管理した。農地の小作人のほか借家は一〇〇軒ほどにも及んだが、空襲で深江の借家はほとんど灰になった。小作人に農地を低価格で売り渡す戦後改革の農地解放も体験する中で、先祖代々の土地を守ろうとした。空襲の焼け跡には、焼け出された被災者が勝手に建物を建てたため、一つ一つ裁判を通じて立ち退きを求める労苦を強いられた。

こうして残された岡田家の土地管理を引き継いだよし子さんは、晩年まで東京からほぼ毎月のように深江に通い続けた。茂左衛門村長が使っていた判子は空襲に遭った村役場から回収され、よし子さんが譲り受け使い続けた。

一 古文書編

1 深江由緒書

夫深江邑ノ往古ノ蓋觸ヲ尋ルニ田ノ字ナリテ、今ノ世ニ残レル上永井ノ辺リニ聊サカ六、七軒ノミ也、其頃ノ土地ノ有様ヲ考ルニ今ノ村内ノ通り筋ヨリ浜手ハ一面芦嶋ニシテ泥也、夫ヨリ北ヲサシテ三町ハカリノ入江アリ、依テ深江号有リ、元録年中迄入江姿ヲ残り栗坪辺リハ芦嶋ナリ、其頃尼崎城主青山侯御領ノ節、磯ノ氏先祖開発シテ新田成リ「一」ヲ栗坪ト云ハ誤リ二、入江ノ時キ三面クレテ坪ノ如ク成四、所ヲ開キシ故ニ、クレ坪ト云也、栗坪ニ非ス

太日堂由来之事

夫太日堂ノ由来ヲ尋ルニ往昔古義真言宗ニ一、松山延壽寺ト号ス、村其宗派タリ、然ルニ二明年中蓮如上人ヲ帰依シ奉リ、村三統ニ戒宗ノ思イヲナシ、依テ真言三密瑜伽ノ奥旨ヲ忘レ年歳累リテ荒廃ニ及ヒ終ニハ退転スト云々、本尊太日如来ノミ其跡ニ残シ奉リヌ、此太日如来本地ヲ尋ルニ伊弉諾・伊弉册尊、夫婦ト成リ給イ、第一天照太日靈尊ト申ナリ、左スレハ太日如来ハ天照太神宮ニテ渡セ給フニ、六月十四日神祭ヲ行フハ、往昔北畑村午頭天皇庄内ノ生土神也、午頭天皇ハ天照太神宮ノ御弟素盞烏尊ニテマシマス、祭礼六月十四日京祇園会同日ナリケレハ、此日神事ナリ、同日ニ祭礼ヲ行テ略セリ、往昔時延壽寺ノ境内ニアリシ敷石數百年ヲ経ル一トテ今ノ世ニ残りテ家々ノ井ノ辺リニ四角ナル石アリ是也、又五輪ノ石塔ナト數多アリ、村童諸方へ持チ散シナトシテ

少今ニ残レリ、今ノ墓所ニモ真言ノ石塔アリ、又太日ノ森ノ北ノ田六、七反ノ字ヲ堂後口トイヘリ、延壽寺タリシ時ノ本堂ノ後口タルニ依テ堂ノ後口トハ云也

武拾貳間半

拾八間

除地

藥応寺旧地之事

此藥応寺ハ天台宗ニシテ藥師如来ヲ安置セリ、境内ニ町餘モアリテ、南ハ蒼海茫一「」シテ紀伊ノ海、和泉ノ浦々モ霞ノ中ヨリ眸ニ遮リ、北ハ翠巒峩々トシテ六甲山峯ニ繞キ風光斜ナラス勝地ナリ、天正年中ニ寺内ヨリ放火シテ一時ニ灰煙ストモ云、又一説ニハ織田信長公ノ時代兵火ニ逢フトモ云々、二説審ナラス、惜哉、其後チ永ク退転シテ其名ノミ残リテ田ノ字トナレリ、其ノ昔ハ救免地ニテアレトモ、藥応寺退転ノ後、地頭是ヲ領シテ免サス、悲哉惜ムヘシ、藥古寺ト云ハ後世ニ至リテ誤レリ

踊松由来之事

人皇五十代桓武天皇ノ御宇延暦五寅年孟夏上旬ノ頃、大洪水ニテ所々川々大ニ破損シテ、諸家ニ大ニ歎キケリ、其頃海上ニ怪シキモノ流れ來リ、村民ハ七集リ是ヲ見レハ神輿ナリ、急キカキ上ケ奉リヌ、此所ニ小高キ台ニ松ノ一、二本モ有ケレハ此所ヘ御遷シ奉リ男女老若トナク群リ踊リ舞イナトシテ勇メ奉リヌ、是ニヨリテ踊リ松ト号ト云々、此所ニ歎請申ヘキニ一面ノ芦嶋ニシテ容易ニ開發成ヘキ地ニアラサレハ、森村ニ神地ヲ改メ此所ヘ遷シ奉リヌ、神輿内ニ神鏡アリ、曰靈龜二年二月初午日ト顯然タリ、伏見稲荷御祭礼二月初午ナレハ稲荷大明神ト崇メ奉リケリ、此所御幸場ト称セリ、是神地ナリ、稲荷太明神ト申奉ルハ倉稲魂ナリ、稲荷ト号スルハ、地主ノ神荷田明神ノ荷ノ字ト倉稲ノ魂ノ稲ノ字ト合セテ神号トスルモノ也、是レ唯一ノ本説也、又此神ハ衣食ノ祖神ニテ、百姓ハ種草ヲ

イノリ、商人ハ商得ヲ願イ工業鍊磨ヲ願イ、公業武士トイヘトモ此神ノ利益ヲ蒙ラスト云コトナシ、サレハ往古ハ天子諸侯トイヘトモ「（註）」食事毎ニ此箸ヲ下サル、先ニ少シ飯ヲトリテ膳ノカタハラニ置セ、宇賀ノ神ニ備ヘタモフト云也

延暦五寅年ヨリ文化元年マテ凡千拾九年ニ及ヘリ

踊り松ノ発句

踊り松ツ女波男波ノ柏子哉 江戸湖夕

名モ高キ松モ千ト世ノ踊哉 竜橋

幾ク千代ト限ラジ物ノヨ踊哉 鳳州

幾ク秋ヲ経テ替ラメ踊松 柳茂

尽キセジノ松ノ姿タヤ踊リブリ 斜月

敷地 式拾貳間 除地

正寿寺縁記

此正寿寺ハ往昔延寿寺退転ノ後、村民蓮如上人ヲ帰依シ奉リ、一字ノ坊舎ヲ建立シテ永井

山正寿寺と号ス、此正寿寺ノ正ノ字ハ延寿寺と号ス、又永井山ハ深江其昔永井ニアリシ故ニ是ヲ用テ山号トス、其頃ハ村民老翁入道シテ替ルノ守護セリ、其後年ヲ経テ御宗門繁榮シテ草庵ヲ建立シテ住職代々勤メ給フス、天明年中再建アリテ今ノ世ニ魏々タリ、住職追々替リ七代ノ住、釈惠音子ニ至リテ本堂再建ス、又自庵トナレリ、此ノ惠音子ハ中古開基ニシテ其勤功拳テ云ヘカラス、釈理円子ノ代ニ及テ三ノ間ノ席ニ進ミタモフ

猶予之沢

此猶予ノ沢ノ由来ヲ尋ニ、源義経公平家追討ノ時、福嶋ノ浦ヨリ御船ニテ進発、讃州下向ノ時海上風波シキリナレハ、深江入江ニ錠リ（註）ヲ下サセ暫ク猶予アラセ給フカ故ニ、猶予ノ名今ニ残レリ、又義経公鑑イ洗イ池トモ云リ、如何トナレハ義経公福嶋御進発有ラセ給フニ、程ナク風波ノ難ニ逢給フ、平家追討ノ門ト出ニハ不吉也トテ、此入江ニテ鑑ヲ洗ハ

セ給フ、依テ鍍洗ノ名又残レリ、後世開發シテ沢トナリ又縮メテ池トナリ、依テ猶予ノ沢トモ、又ハ鍍洗イ池トモ云ナリ、往古ハ沢池ノ如キモノニハアラス、此池栗坪、磯野氏新田ノ内ニアリ、今ハ其姿タ少シ残リテアリ、見ルマテモナシ、然レトモ古跡ナリ

鏡子池

鏡子池ト云ハ踊松ノ境内辰巳ニアリ、昔シ種荷ノ神輿、此所ニテ勇メ奉リ村民男女トモニ踊リ舞ナトシテ酒宴ヲ催シ終日戯ケル、村民ノ内ニ一人戯レノ余リニ鏡子ヲ頭ニ載テ、此池ノ辺ヲ舞シトナリ、依テ鏡子カ池ト号ス、古跡ト云ニモ非サレトモ記スモノナリ

片田井川蜚合戦之事

片田川蜚合戦ト云コト聞リ、俗ニ夏至ノ夜ナリト云、左ニハ非スシテ定マリナシ、予一度是ヲ見ル、蜚ル群リ集ルコト、其ノ数ヲ知ラス、暫時ニシテ退クコト早シ、是ハ此ノ所ニ限ルヘカラス、古歌ニモ蜚スタクト読シ侍ル

ハ是ナリ

長池由来ノ事

夫太日前ノ池ヨリ引続キテ東ノ長池マテ通シタリト「一」今ノ通り筋ノ北側井ヲ掘リナトスレハ杭木底ヨリ出ルコトアリ、是往昔ノ証ナルヘシ

羽柴筑前守下知一札

羽柴筑前守侯、摂洲巡見之折節、庄内へ下シ置レシ三ヶ條ノ書、磯野氏ニ留リス、此時代庄老ト云テ、一ヶ村ニ一軒古キ家ヲ庄老ト号シテアリ、磯野家ハ筆頭ト見ヘテ此家ニ留リスルモノト見ユ、磯野家名ヲ書記シテ下シ置レタレハ家ノ系図トモ云ヘシ惜ムヘシ

【解題】

この史料は、江戸時代の深江村で、大庄屋や庄屋を担った永井吉兵衛家文書である。文中に文化元年（一八〇四）の年号がある。深江の地名の由来は高橋川の入江が深く入り込んでいたため、元禄年間（一六八八）

一七〇一)まで残っていたという。

寺社の由来

大日靈女神社の由緒についてその前身は太日堂といい、元は古義真言宗延壽寺だったが、文明年中に蓮如上人に帰依して浄土真宗に改宗したと記されている。その時残された大日如来を祀ったもので、祭礼は六月十四日だとする。また宮ノ後という小字は大日の森の後ろにあるためだとする。

薬応寺は「武庫郡誌」には、延壽寺になり現在の正壽寺であるとある。「深江由緒書」には薬応寺は天台宗と記載している点で注目される。また天正年間まで薬応寺があったという記述も他に例がない。

踊松について、延暦五年(七八六)に洪水があり神輿が海上に流れ着き、中に靈龜二年の神鏡があったと記す。踊松の場所に遷し老若男女が躍ったために踊松と呼ばれたと、よく知られた伝承を載せ、一帯は芦嶋だったた

め現在の森の稲荷神社に祀ったとする。

踊松を発句にした作品を五句掲げている。この中で、江戸湖夕とあるのは、近江の俳人で俳諧七部集の「炭俵」に作品が収録される。掲げられている「踊松 女波男波ノ…」の句は、「摂津名所図会」に掲載されている。湖夕に江戸と冠がされ竜橋・鳳州・柳茂・斜月にはその記載がないことから、残り近江の俳人だろう。竜橋と名乗った俳人は複数おり人物を確定できていない。

正壽寺縁起では、延壽寺衰退後の寺とし、小字の永井に集落があったために永井山という山号を用いたとする。当時は村人の長者が出家して住職を務めていたが、天明年間の釈惠音の時に本堂を再建し、自庵としたという記述はほかの文献とも一致する。「中古の開基」で、その子理円の代には、本山門主に対面するとき三問ノ間に詰める地位を得た。

池と沢・川の記述

池や沢、川の伝承や景観がもう一つのメーソンの記載内容である。

猶予の沢は、源義経が平家を討つため讃岐に向かう際に、海上の風波が高く深江で風待ちをしたために付いた地名とする。高橋川が深い入江になっていて風待ちに使われたことを反映した伝説だろう。「深江由緒書」が書かれたころは栗坪という地名になり磯野氏の所有する新田になっているとする。この栗坪は、クレ坪が転じたもので、冽る、すなわち土地がえぐられた場所が由来とする。

踊松の境内にあった銚子池も記述されている。森の稲荷神社の祭礼で神輿が踊松まで渡御しこの地で村人が酒宴を開いた。その際、銚子を頭に乗せて池の周りを回ったという。銚子池は「高い高橋、踊松、銚子が池の片葦葉」と踊松と絡めて俚謡に歌われている。

片田川では蜚合戦と呼ばれたホタルの群集

ぶりを記載している。片田川とは高橋川の北東側へ流れていた支流で、ホタルが群生する環境だった。

秀吉の下知状と磯野家

羽柴秀吉の下知状の記述もある。おそらく天正十一年（一五八三）八月二十九日に大坂城築城に当たって秀吉が出した「定」のことを指しているのではなからうか。百姓に対しいわれない要求をすることを禁止し、田畑を荒らさず、石持ちに宿を貸すことを禁じた三方条を、深江を含む本庄・芦屋郷・山路庄に出した。「深江由緒書」が作成されたころには、磯野氏の手元にあったことが記されていて貴重である。磯野氏は各村に一軒あった庄老と呼ばれる家柄で、近世中期ごろまで村落間紛争の仲裁なども行った。

2 寺社吟味帳

深江村

一向宗西本願寺末寺

正寿寺

京都常楽寺下 当看坊 空照

此寺開基之年曆相知不申候得共、本尊弥陀之画像、西本願寺九代目実如上人裏書有之を、天文年中正福と申僧安置仕、代々相伝仕候、八十年以前慶長年中之住持了順、二代目了喜、三代目正円、四代目当看坊空照二面御坐候、以前寺号無御坐候処、慶長年中本寺より木仏寺号申請候

一、堂 梁行五間半

葺葺

一、庫裏 梁行三間壱尺六寸

葺葺

一、納屋 梁行壱間半
桁行壱間半

葺葺

一、鋪地 拾八間
拾三間

年貢地

大日堂 表三尺壱寸五分

板葺

御拝有

一、敷地 貳拾二間半
拾八間

板葺

是ハ古来より御坐候得共、建立之由来年曆相知不申候、前々より村中として支配仕来候

当年火灯 庄右衛門

深江村庄屋 忠兵衛

年寄 重右衛門

同断 弥三右衛門

右菟原郡之内在々廿二ヶ村支配

大庄屋味泥村 九良右衛門

同郡之内在々拾七ヶ村支配

大庄屋打出村 善吉

右は今度寺社御改二付面、尼ヶ崎御領村々寺社無残見分之上、吟味仕帳面之通、相違無御座候、以上

元禄五申年十二月

青山播磨守家来

星野七郎兵衛

田中九右衛門

秋田岡右衛門

伊藤次郎左衛門

右社寺吟味帳、当地大庄屋高井与左衛門及郡家村大庄屋平野家ニ藏ス、多少異同アリ、平野家藏ニヨリテ写置、高井家藏之モノハ保久良神社祠官猿丸氏之ヲ写ス、二者対照スヘキモノ也

【解題】

「社寺吟味帳」は元禄五年（一六九二）、幕府の命によつて尼崎藩が寺社を調査したものである。当時の大庄屋打出村組に所属した一七カ村（打出・芦屋・津知・三条・森・中野・小路・北畑・田辺・田中・岡本・野寄・横屋・魚崎・西青木・東青木・深江）の寺社明細が村ごとに記載され、最後が深江村に

なっている。昭和十七年（一九四二）に深江地区を含む武庫郡本庄村（現神戸市東灘区）の歴史編纂に着手した村史囃託松田直市が収集した。

これまで正寿寺は大正十年（一九二一）に発行された「武庫郡誌」などにより、寛永十年（一六三三）に現在地に移り寛永十九年に本山から寺号を授けられ、その時の住職空照が開基とされてきた。現在の正寿寺の過去帳でも空照を開基とする。以降恵空―龍音―理山―理伝―延寿―恵音―理円―円乗と続き明治維新を迎えた。本書所収の文化元年（一八〇四）ごろに作成された「深江由緒書」でも、恵音を七代目と記している。

ところがここに掲げた「社寺吟味帳」によれば、正寿寺の由緒は不明だが、慶長年中（一五九六―一六一五）の住職了願の時代に木仏寺号を受け、以後二代目が了喜、正円と続き、元禄五年の住職が四代空照であると記

載されている。「社寺吟味帳」は元禄五年の同時代史料なので、この時は四代目だった空照が、いつの間にか初代と変更になって今に至っている。

その変更を直接語る史料は見当たらないが、安永二年（一七七三）に手斧始テノコを行い天明六年（一七八六）に本堂を再建した惠音が、その棟札の中で「当山七代住 惠音」と名乗っていることから、この時代には空照ウツロウが開基と考えられるようになった。

七代目惠音以前は、寺は村の共有であり、住職も村の長老が交代で務めるような状況が続いたという。惠音の時代になって住職の自庵となった。このため惠音は「中興開基」と呼ばれている。そのときから惠音が七代、廻って空照が開基と定められのではなからうか。

二 近現代地図編

近代になり正確な測量などに基づいて作られた地図から深江周辺の変化を見てみよう。

【小字図】

明治になって地租改正が行われ、小字を示した字限図が作成された。深江では明治九年（二八七六）の「深江村地籍図」（神戸市立博物館蔵）がある。江戸時代の小字は大幅に統合されたが、その後大正時代（一九一二〜二六）まで使われた。垣添・垣内・大日前・島ノ内などが集落の中心だった。

中世に存在したとされる薬王寺が高橋川中流に小字として残り、場所が推定できる。また海岸には堤ヶ外の小字もあり、かつて堤防がかなり内陸だったことをうかがわせる。

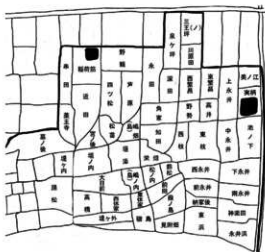


図1 明治～大正期の深江小字図

【地形図】

明治四年（一八七二）兵部省に陸軍参謀局が設置され、参謀本部測量局を経て明治二十一年、参謀本部長直属の独立官庁・陸地測量部となった。昭和二十年（一九四五）参謀本部は解体され、業務は内務省地理調査所に移管され、その後国土地理院となった。主な作成地図に、二十万分一輯製図、二十万分一帝國図、五万分一・二万五千分一・二万分一の地形図、百万分一東亜輿地図・外邦図がある。近畿中心部は明治十八年から測量した仮製地形図が作られた以降、定期的に測量と発行が行われた。深江の集落が変わる様子が見える。



図2 明治18年測量 仮製2万分の1 地形図



図3 明治42年・43年測量 正式2万分の1 地形図



図4 大正12年測量 1万分の1 地形図



図5 大正12年測量・昭和2鉄道補入 2万5千分の1 地形図



図6 大正12年測量・昭和2鉄道補入・昭和4年改測
1万分の1 芦屋



図7 昭和7年測量 1万分の1 地形図



図8 昭和10年測量 5万分の1 地形図

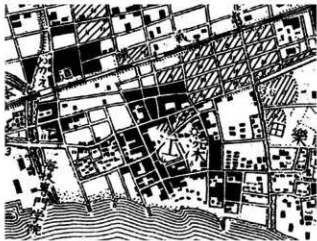


図9 昭和22年測量 2万5千分の1 地形図 (斜線部分は水田耕地)



図10 昭和27年測量 1万分の1 地形図 (斜線部分は水田耕地)



西部から国道43号線の造成が進んでいる



図 11 昭和 32 年測量 1 万分の 1 神戸市街地図



図12 昭和41年測量 1万分の1 神戸市街地図

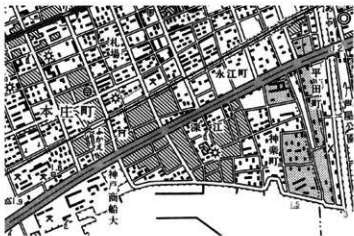


図13 昭和44年測量 2万5千分の1 地形図



図14 昭和45年測量 1万分の1 神戸市街地図



図15 昭和53年測量 2万5千分1 地形図

【都市計画図・職業図・町並図】

神戸市は昭和2年（1927）市域外の深江も含んだ道路網構想を立てた。昭和9年には灘深江区画整理組合が結成され、阪神電車より北側で区画整理が進められ、地番地図も発行された。



図16 昭和2年 神戸市都市計画街路図

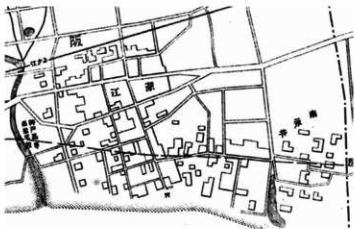


图 17 昭和5年 2万分の1 最近实测神戸都市計画地図



图 18 昭和9年ごろ 灘深江土地区画整理組合道路計画図



灘深江土地区画整理事業は昭和10年に始まり、昭和13年に完工。
阪神電車北側で現在の町並みが出来上がった。



図19 昭和9年ごろ 瀬深江土地画整理組合確定図



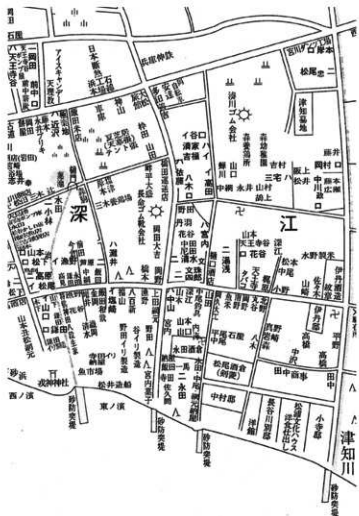
岡田茂義氏の旧宅は下水井の田園地に建てられた



図20 昭和10年代 3千分の1 本庄村全図 深江の中心部



图21 昭和10年 大日本職業別明細図



昭和13年本庄小学校卒業生による。以東の拡大図は76頁収録

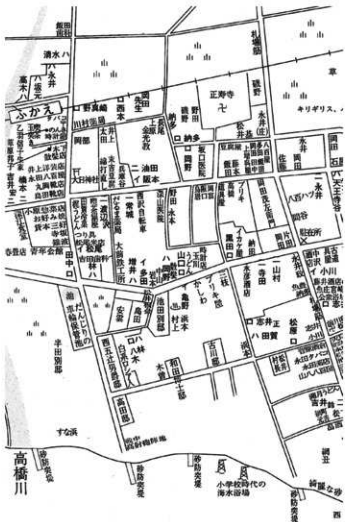


図22 昭和10年代 深江の回想図



图 23 昭和 12 年 大日本職業別明細圖

【災害・戦災図】

都市化が進むと、災害や戦災も大きな被害をもたらした。

昭和十三年の阪神大水害は、芦屋川、住吉川流域に大きな被害をもたらし、死者六一六人、被災家屋は六万戸に達した。

昭和二十年には五月、六月、八月に空襲に見舞われた。中でも五月十一日の空襲では、本庄村では死者三七一人、重傷者五〇人、全半焼一〇三戸、全半壊七三二戸に及び、隣接する魚崎町や本山村と比べても被害が突出した。川西航空機甲南製作所が標的とされた。

昭和四十二年にも水害があり、都市化の進展によって河川の暗渠化が進み、その結果、高橋川流域にも大きな被害をもたらした。

平成七年には阪神淡路大震災でまたも大きな被害に見舞われた。阪神高速道路が六〇〇メートルに渡って倒壊した。



図24 昭和13年 六甲南麓水害状況図
(甲南高等学校々友会「阪神地方水害記念報」)



図25 昭和20年 御影・住吉・魚崎・本庄・本山罹災状況図



図26 昭和42年 水害図 (『本庄村史』地理編)

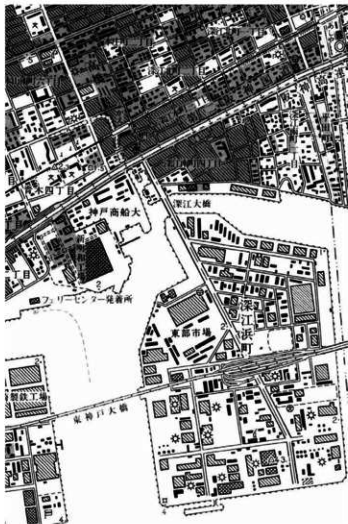


図27 平成7年緊急修正測量 2万5千分1
阪神淡路大震災被害図(網掛けが被害甚大地)

【人工島図】

埋め立ては昭和三十九年に始まり、神戸市須磨区高倉山から土砂が運ばれ、跡地には高倉山団地が設けられた。運ばれた土砂は一七二七立方メートルに達し、昭和二十八年から四十五年までの第一期海面埋め立て事業で最大規模となった。昭和四十四年に深江浜町と命名された。埋め立てにより昭和四十七年には漁業組合が解散した。

最初に立地したのは中央卸売市場東部市場で、卸売団地・トラクタターミナルが設けられ、神戸市東部の流通機能を担うことになった。日本初の食品コンビナートが形成された場所となった。

新神戸プールが設けられ多くの利用者でにぎわったが、震災のため閉鎖された。昭和四十九年兵庫県立東灘高校が設置され、深江音頭の復活などにも取り組んでいる。



図28 昭和42年測量
2万5千分の1 地形図



図29 昭和44年測量
5万分の1 地形図



図31 昭和45年部分修正
1万分の1 神戸市街図

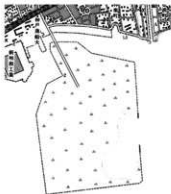


図30 昭和44年修正測量
2万5千分の1 地形図



図33 昭和60年修正測量
2万5千分の1 修正地形図



図32 昭和56年修正
5万分の1 地形図

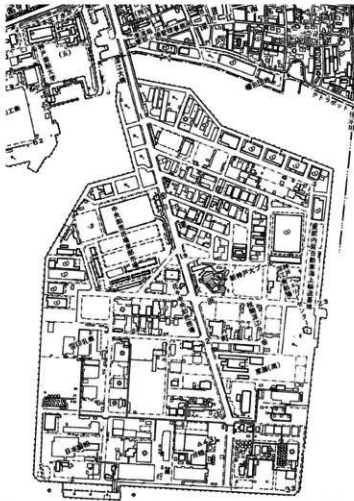


図 34 平成 8 年修正 1 万分の 1 神戸市街図

第二部

岡田茂義氏を偲ぶ

岡田茂義様・よし子様が遺されたもの

鳥山半六

一 井上中将からよし子様へ

岡田よし子様は、満州国大同学院院長であった井上忠也中将の長女として生まれ、神戸は深江の地で代々名譽ある地位を占めてきた岡田家の第十代当主岡田茂義様に嫁がれた後、茂義様と二人三脚で岡田家の資産を管理してこられました。

私の岳父 遠田義昭弁護士は、茂義様・よし子様とは半世紀以上にも亘る長いおつきあいで、私は岳父の紹介でよし子様とご交誼いただくようになりました。わずか半年足らずの短いおつきあいでしたが、その間に、よし様様の筋金入りの正義感と、頑固一徹ともいえる矜持を垣間見る機会が幾度かありました。

そして、これはまったくの偶然なのですが、別件の文献調査の過程で、ある裁判の判決文中によし様のお名前を発見したときは非常に驚きました。それは弁護士の違法行為の抑止義務に関する次のような判決です。

「弁護士は社会正義を実現すること等の使命に基づき、誠実にその職務を行い、社会秩序の維持に努力しなければならないとされている（弁護士法一条）のであるから、自己の受任した法律事務に関連して違法な行為が行われるおそれがあることを知った場合には、これを阻止するように最大限の努力を尽すべきものであり、これを黙過することは許されない。これは、単に弁護士倫理の問題であるにとどまらず、法的義務であるといわなければならない。」（東京地判昭和六二年一〇月一五日 判例タイムズ六五八号一四九頁以下）

この判決自体は私も承知していたのですが、私がライフワークの一つとする弁護士倫理における著名な判決の当事者がよし子様であったことには、何か因縁めいたものを感じざるを得ませんでした。個人情報やプライバシーにうるさい今では考えられないことですが、当時の公刊物には個人の実名がそのまま掲載されており、そのおかげでこのようなご縁に気づけたことは、まさにセレンディピティといってもよいでしょう。事案は、共有建物を無断で取り壊した相手方とそれを黙過した弁護士を訴えたもので、井上忠也中将譲りのよし子様のご正義感が窺えます。

「不正を許すことができないという、その感情を持ち続けなければ、弁護士たる値打ちはないと私は思う」

——三〇数年前の結婚式での恩師色川幸太郎先生（元大阪弁護士会会長・最高裁判事）のスピーチを、私は今でも時々思い出しますが、弁護士相手に堂々と渡り合われたよし子様の訴訟活動が右のような格調高い判決として結実し、わが国の「法の支配」の一端を担う弁護士のスタンダードとして受け継がれていることには感慨を禁じ得ません。裁判で争うことの苦労や負担を思うとき、よし子様の面目躍如たるエピソードと考へ、ご紹介させていただく次第です。

二 よし子様から誠子様へ

「これからのことは誠子が主導してやってください。」

——これは、よし子様の突然の訃報に接し、急遽大阪から東京に駆けつけた遠田弁護士が、よし子様の身の回りのお世話をされていた家政婦さんから聞き取った、よし

子様最後のお言葉です。

よし子様は、亡くなる前夜、三女福田誠子様を呼び出して右のように言い遣し、翌朝、卒然としてこの世を去られました。それは、よし子様らしい、誠に潔い旅立ちでしたが、あまりに突然のことに、誠子様は、自分が一体、何を託されたのか、それを追いつめ、彷徨っておられるようにみえます。

しかし誠子様は、ISAK JAPAN（インターナショナルスクール・オブ・アジア軽井沢）での学生支援、津田塾大学での留学生ネットワーク支援等、次世代を担う若人支援の活動を長く続けておられます。誠子様は意識されていないかもしれませんが、私には、それがまさに茂義様とよし子様の、そして、大同学院院長であった井上中将の思いとも一致するように思われるのです。

茂義様は、三和銀行（当時）監査役在任中はもちろん、退任後も堂島会、堂和会、洛秋会、凌霄会、水霜談話会等、人との繋がりを大切に、後進育成にも努められ、また、よし子様は、それを支えつつ、自らも、孤児を養育する戦後施設のことを回想され、「深江の地で幼稚園をつくりたい」と手紙に認められていたことがあったからです。

「金を遺すは下、仕事を遺すは中、人を遺すは上」

(元東京市長 後藤新平)

——人と繋がる、後進を育てる、正義を貫く、矜持を保つ。

そんな、人として大切なことが、井上中将からよし子様へ、茂義様・よし子様から誠子様へ、そしてさらに次の若い世代へと、深江を離れた東京の地で脈々と受け継がれていることに、茂義様・よし子様をはじめ岡田家に連なる多くの先人達も、きっと喜んでおられるのではないでしょうか。

(弁護士法人色川法律事務所東京事務所担当パートナー 弁護士)

- 1 正確には「W.C. ISAK Japan (United World College ISAK Japan)」。二〇〇九年に開校した国際的な学際的教育機関で、二〇二〇年には「アジアのトップ10ボーディングスクール」の一枚に選定。軽井沢町の自然豊かなキャンパスで、多様なバックグラウンドを持つ生徒たちが学びあい、異文化理解と国際協力の精神を養っています。
- 2 よし子様は、茂義様が残された克明な日記をもとに、二〇〇四年三月、「糸櫻」と題する回想録の小冊子を発行されており、それを参考とさせていただきました。

岡田茂義邸について

辻 照男

神戸市東灘区深江南町一丁目に残る岡田茂義邸は、昭和十三年（一九三八）に深江文化村に近接して竣工している。

昭和十二年より本格化した日中戦争の影響で、国が鉄鉱の配給規制を始めた時期に建設されており、各種資材の入手困難な中では設計・施工を担当した大林組をはじめ掘金物など、関係者の相当な苦勞・工夫があつたものと推察される。

建物配置は約六三〇坪（二一〇〇平方メートル）のほぼ正形な土地の北端に建物が位置し、南端には海岸近くの潮風を防ぐ目的も兼ね、松を主として多数の植栽が行われ、その中間に広大な芝生庭が設けられた配置となっている。

建屋は木造二階建て瓦葺（スバニツシユ瓦、無釉）で、一階六五坪（二一五平方メートル）二階四〇坪（一三五平方メートル）、延床面積一一三坪（三七〇平方メートル）の規模となっている。

平面計画の特徴として、表・裏二ヶ所の玄関と屋内階段を備え、手洗いも一・二階

合わせて三ヶ所あり、使用人室を含め多数の来客にも対応しつつ、家人のプライバシーにも配慮した計画がなされている。

特に芝生庭に面する南面には、サンルーム・広縁・ロジアなどが設けられ、太陽光の季節変化をうまく取り入れることのできる、快適な緩衝空間が設けられている。

平成七年（一九九五）に起きた阪神・淡路大震災時には、管理人が居住使用中であったが、東西に長い平面ゆえに甚大な被害を免れ、平成十四年に諸般の事情により検討された解体・売却の話も消えて、同年四月より保存・修復・再利用の方針で検討が進められ、同年十二月より大林組施工で工事着手し、翌平成十五年三月に修復完了している。

工事は、瓦・外壁・建具・床タイル・暖炉・ステンドグラス・木軸・ガラス・樋・門扉など多岐にわたり、修復後の再利用に対応する為、電気引き込み・給排水・ガス設備の更新も行っている。

平成十五年四月以降は一時幼児教育施設として使われた。保存目的に叶う利用であった。築後八〇年を経て昭和初期の上層階級の生活を垣間見ることのできる施設は、現存するものも少なく、個人所有でありながらも多大な費用・労力をかけて、保

存修復に取り組んでこられた姿勢は高く評価され、今後の各種文化保存事業に引き継がれることが望まれる。

価値観が激変する時代であるからこそ、気品ある岡田茂義邸の佇まいが長く地域の文化遺産として親しまれ、愛され続けることが重要で、地域としてどのように支援協力していけるかが問われている。

父の思い出

福田誠子

文化活動への関心

父は、大学時代深江の文化村に出入りすることにより、当時の日本の文化の最高峰であった小磯良平、朝比奈隆たちと知り合い、西洋文化に親しく接することができ絵画、音楽などを亡くなるまで楽しむことになった。

この冊子でもご紹介いただいた小磯良平のデッサンは父が油彩の作品を購入した際にこんなものもあるよと、何枚かを小磯良平がばらばらと付け加えてくれたものである。「君は僕の最初のパトロンだよ」は、小磯良平が台湾旅行に行く資金の足しに父が油彩の絵を購入した時に、小磯良平が言った言葉と聞いている。

父は朝比奈隆を通して音楽にも興味を持ち、チェロをたしなんでいた。私が日本銀行に勤める夫仁司の赴任先ニューヨークに住まっていたおり、息子の卓矢が習っていたバイオリンの発表会があると聞き、父はわざわざ日本から母と一緒にニューヨーク



写真1 永楽善五郎造
「仁清寫牧童置物」

まで駆けつけてくれた。その折、暇に任せて父が仁司のチェロで弾いたサンサーンスの「白鳥」の音色はいまだに忘れることができない。

父は三和銀行の京都支店長を務めたおり、日本文化に深く触れる機会があった。京都支店にはお茶室があったが使われていなかったために、母が裏千家淡々斎宗匠のご指導のもとお茶室開きのお茶会を催した。そのとき裏千家からいただいた永楽善五郎

造「仁清寫牧童置物」、嘉代子夫人から頂戴した久宝作水差しは今私を受けついでいる。父は京都支店長の後、役員として本店に戻ったが、深江の庭に北山杉を植えて京都を懐かしんでいた。



写真2 同 箱書き

父は日本陶芸倶楽部に属し、最期まで陶芸を楽しんでいた。日本陶芸倶楽部は、誰でもが陶芸を学ぶこと



写真3 久宝作水差し



写真4 白象嵌食籠
「春夏秋冬」

律儀な印花象嵌の中央に、ご自身で
手彫りしたのびやかな春夏秋冬の文字が、
作品を魅力的にしています。

ができる場所と良き指導者を提供し、「アマチュア陶芸の振興と普及」を目的として、昭和四十二年発足した。初代会長は財界人で茶人の松永安左エ門氏、初代理事長は哲学者で茶人の谷川徹三氏を迎えた。

次々と作陶している時は、「こんなにならなくて、しまう所にも困ってしまおうでしょ」と父に言っていたが、亡くなってみると、父の作った茶碗に手のぬくもりを感じ、



写真6 焼締金彩長角皿

たっぷりの金を塗り込んだ月が、焼締の枯野の皿に華やぎを。



写真5 三彩花瓶

足元からすくっと立ち上がり、肩から胴にかけて丸く、首は細く、口は少し広げた形の花瓶がお好きでした。



写真7 焼締金彩松竹梅図盆

どっしりと根を下ろし、見事に枝を張った老松に、岡田家の繁栄振りが見て取れます。

なんとも懐かしく思う。日本陶芸倶楽部の栗原直子理事長に現存する作品から四点（写真4〜7）を撰んでもらい、寸評を加えてもらった。

阪神・淡路大震災を乗り越えて

阪神・淡路大震災の直後、私は九〇歳の父、八〇歳の母を連れて何度か東京と深江を往復した。まずは、深江南町の旧宅をどうするか。夫仁司が日銀退任後、勤めた日建設計でつながりがあった辻照男さんに判断をお願いした。休日にセーター姿で旧宅に駆けつけてくださった辻さんが「これは大変貴重な建築。是非存続されるべき」と判断してくださり、父茂義が存続の決断を下した。せっかく植えた北山杉が伐採されるということを知ったことも大きかった。

すでに売却の仮契約が結ばれており、高額な違約金を払って保存を決めた。保存に当たっては施工した大林組による修復も必要で、辻さんにご指導いただいた。それなくしては旧宅は解体・売却を免れなかったと思う。夫仁司は旧宅保持の決定を受け、すぐさま大震災の復興資金の借入について動いてくれた。

震災で忘れられないのは、借地人問題である。大震災の後の当時の国の方針は賃貸人の被災者救済の発想しかなく、賃貸人退去に際して「各戸に敷金（賃料一〇カ月分）全額を支払うこと」という規定が設けられた。深江駅前に賃貸マンションを保持

していた者としては修繕費の支払いとともに、突然多大な負担が発生することを意味した。同じ被災者なのに不動産を賃貸している者にとつては大変厳しいものだった。夫仁司は高校時代の友人を介して融資に奔走してくれたが、八〇歳の母、九〇歳の父だけでは融資を受けることができず、私が融資の連帯保証を引き受けることになった。到底個人で背負いきれる金額ではなく、連帯保証人になることについては、夜も寝れないほど悩んだ時期もあった。ただ今となつては、深江の旧宅が残せて、本当によかったと思う。夫仁司の応援には感謝しかない。

大震災では、父は正寿寺のご住職から倒壊したお寺のために寄贈の依頼を受けた。父はどのようなものを寄贈させていたかどうかと、あれこれ考えたようである。京都で学んだ数々のお寺のことを思いめぐらしていたのかもしれない。そのためご住職から親鸞聖人の尊像のお申し付けを受け、別のものの寄贈を考えていたのか、少々ムツとしていたことを懐かしく思い出す。父の亡き後、ご住職にお会いするたびに「若気の至りで……」とにこやかに応じてくださり、二人で往時の父を偲んでいる。祖父の茂左衛門は小学校にグラントピアノを寄贈したと聞いている。父が正寿寺にお聖人様のお像を寄贈することにより、岡田家代々のお仲間入りができたような気がする。

庭に父の面影を追う

父は庭で作業することを大変好んでいた。深江の六〇〇坪の広さには及ばないが、東京・上原でも三〇〇坪近くの広さの屋敷では一四本の樹木が渋谷区指定樹木とされ、池の鯉とともに父を楽しませてくれていた。父が亡くなった四月四日に庭の枝垂れ桜が咲いて、父を送ってくれたことは忘れられない思い出である。

その庭も令和四年家屋とともに取り壊されてしまった。娘の暎子は祖父の思い出の詰まった庭が取り壊されるのが忍び難く、直前に建築の模型の専門家に依頼して上原の庭の模型を作ってもらった。この模型は現在夫仁司の実家、田園調布の家に置かれている。毎週ホームから連れ帰る夫の母は、上原の門から入りお玄関までのこぶしの花の美しかったこと、枝垂れ桜の見事だったことを模型を通じて嬉しそうに懐かしんで



写真8 東京・上原の岡田茂義邸の庭模型

くれている。夫の母が上原の桜の美しさに共感し、田園調布の庭の真ん中に植えた枝垂れ桜は令和五年の春も咲いてくれた。

先人の思いは場所を越え、時を越えて花開くものようである。

（作品寸評…日本陶芸倶楽部理事長 栗原直子）



写真9 同模型 部分



写真10 福田家に咲いた枝垂れ桜
（令和5年・田園調布）

深江旧宅の思い出

福田卓矢

「神戸市深江の旧宅」と呼んでいた住宅には思い出がある。それは私の人生の中で度々、ターニングポイントとなったからである。

まず、最初の思い出は、大学進学である。一九歳まで親元で暮らし、初めて親元を離れ、一人暮らしとなる最初を深江で迎えたのである。関西大学に進学した私は大阪府吹田市の大学の裏（通称、関大裏）にてアパートを借りて暮らすこととなるのだが、入居が入学式に間に合わず、最初の一週間程度を深江から通うこととなったのである。関西のことが全く分からない私が深江駅から阪神電車に乗って梅田の地下（梅地下）を通過して阪急北千里線に乗り換え関大前まで行く。当時、神戸電設の事務所が一階にあり、その木村さんにお世話になり、寝具等を用意していただき、二階の和室にて一人寝起きして、大学に通っていた。今でも母に言われることだが、大阪駅で別れた入学式に向かう私は一度も振り返らずに向かったとのこと。しかし、内心は初めて一人暮らし、初めての関西であり、ドキドキでいっぱいだったと思う。

次の思い出は表の駐車場である。大学時代に親の乗っていた車をもらい、関西で乗り回していた。ただし、駐車場を自宅の近くに借りるのではなく深江の住宅に付属していた駐車場に止めていた。そのため、車を使用する際は関大裏から深江まで行って、車に乗っていた。試合に行くとき、合宿に行くとき、友達と遠出をするときなどよく車で行った。そのたびに深江の駐車場に車を取りに行っていた。友との楽しい旅の思い出や試合のうれしい結果、悲しい結果等様々な思い出が駐車場を起点にあった。

三つ目の思い出は社会人との初めての接点である。旧宅の利活用について何が考えられるのかを岡田の祖父母は検討していた。私は関西大学で建築学を専攻しており、いい機会になればと祖父母はその検討の場に私を連れて行ってくれた。打ち合わせの場は私が初めに寝泊まりをしていた二階の和室である。そこには設計者、施工会社等の方々が集まっており、初めて名刺交換を行い、打ち合わせの場に出席した。一つの建物をどのようにして長く使うのか。そしてそこにどのような価値を見つけたのか。様々な意見が出てきた覚えがある。初めて仕事の場に触れたのが深江の旧宅であった。現在、深江の旧宅は旧岡田茂義邸としていくつかのホームページに掲載されており、ステンドグラスの装飾についての評判が良い記載をいくつも見ることができ



玄関ロビーのステンドグラス

しかし、使用されていない期間が長くなってきている。建物は使用されていないと風化が進んでしまう。私の様々な思い出とともにある建物が今後も活きた形で残っていきますように。

美酒と螺鈿

竹田精一郎

私が日本陶芸倶楽部に入社した頃、岡田様は主に証券経済倶楽部のやきもの同好会で作陶を楽しんでおられました。その後、作陶頻度が増えるに従いお手伝いをさせて頂くようになりましたが、若僧の私に対しても「竹田先生」と丁重に接して下さいました。プライベートでも随分と可愛がっていただき、当時大人気の「越乃寒梅を出す店が有るから」と誘ってくださったり、澤乃井（青梅の地酒）が飲めるからと渋谷の居酒屋でご馳走になったり、証券経済倶楽部主催の吟醸酒を飲む会では、発酵学者・小泉武夫氏の講演と私には分不相応な美酒をふんだんに楽しませて頂きました事も良しい思い出です。

さて作陶については常に綿密なる計画性を持って臨まれていました。その中の一つが、螺鈿と陶器との融合。漆工芸で一般的な螺鈿技法を御自作陶器に言うお考え。陶磁器の場合、焼成完成後に樹脂接着剤で螺鈿を貼り付ける方法をとります。いくつかの試作を兼ねた制作を繰り返し、本番は瓶子形を発展させた花瓶で。成形し易い信



写真 螺鈿象嵌黒袖花瓶

楽中目土を使用し、紐作り技法で積み上げ、数日後の削り仕上げでボディが完成です。壺の肩周辺に、焼成後螺鈿を埋め込む為の段差を掘り下げ生地での作業は完了。乾燥、素焼後、艶黒袖を施し本焼成。

いよいよ最終工程、螺鈿の貼付けです。小さな螺鈿ピースをピンセットで一枚一枚貼って行きます。慎重さを要する数時間の作業の後「螺鈿象嵌黒袖花瓶」の完成です。岡田様はこの螺鈿シリーズを日本陶芸倶楽部のチャリティー作品展やアマチュア作品展にご出品されました。遺族のお手元に現存してないが、幸い写真が残っていた。八寸程の漆黒の花瓶に白輝色に輝く螺鈿一面。岡田様、晩年の力作です。

(日本陶芸倶楽部)

あとがき

福田 誠子

父岡田茂義は三和銀行を退職するにあたり、仕事を東京の地に定め、深江を離れ東京に居を移すことにした。東京在住が六年ほどになった頃、深江・岡田本家の東京の家として三〇〇坪ほどの土地を購入して、佐藤秀工務店に二階建ての住居建築を依頼した。佐藤秀工務店は住友家の本宅など住宅建築として著名な住宅建設会社で、庭は深野園に回遊式の池のある作庭を依頼した。

父が亡くなった平成一五年四月四日に枝垂れ桜が咲き、父を送ってくれたことが忘れられない。令和四年家屋とともに庭も取り壊され、父が愛した庭はなくなり数本の指定樹木が残るだけとなった。枝垂れ桜もなくなった。

しかし、夫・仁司が受け継いだ田園調布の実家には、仁司の母が父の庭の桜の木を模し、庭の真ん中に植えた枝垂れ桜の花が毎年花をつけてくれる。

また、父が作っていた盆栽の一つ、梅の盆栽を譲り受けた長男卓矢は、父が亡くなってからも長い間、マンションのテラスで毎年丹精を込めて世話をしてくれている。卓



写真1 枝垂れ桜と父母、親族
(岡田よし子『他び草』より)

矢は学生時代に一時深江の旧宅に住み、愛着を持っている。妻の啓子さんは東京育ちだが、祖父母は関西在住だったため東京と関西を行き来していて、卓矢夫婦は深江に強い思いを持っていてくれる。そんな啓子さんから昨年末に、父茂義から譲り受けた盆栽について「お正月を待たずに花が咲きました」という写真が送られてきた。ここでも花を介して命がつながっている。これまで全く関西に縁のなかった長女暁子の夫稲垣博信さんが、このプロジェクトが始まってから大阪大学で工学博士号をとったことで、深江を近くに感じて



写真2 福田家の庭
(田園調布)



写真3 梅の盆栽
茂義から孫の卓矢が受け継ぎ令和5年末に春を待たずに花を咲かせた

くれるのではないかと喜んでい

くられるのではないかと喜んでい
大国様のご丹誠の「深江の心象風景」は、父がこよなく愛した深江への思いが満ち溢れていると思う。日本陶芸倶楽部の栗原直子理事長、父がご指導を受けた竹田精一郎先生から父の陶芸についての玉稿をいただき、深江文化村から始まった父の「文化面での活動」の集大成を見る思いがする。この本を通して、「田園調布の桜」や「梅の盆栽」のように父の深江への思いが、次の世代に花開くことを願っている。

令和六年一月

深江の心象風景
～ふるさと神戸の回想録～

令和6年4月4日発行

著者 岡田 茂義

編集 大国 正美

〒658-0021 神戸市東灘区深江本町3-5-7
神戸深江生活文化史料館

発行 福田 誠子

印刷 田中印刷出版株式会社

〒657-0845 神戸市灘区岩屋中町3-1-4

